中川遺跡

一ツ塚古墳

変電所・送電線鉄塔建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1996年3月

長野県飯田市教育委員会

中川遺跡

一ツ塚古墳

変電所・送電線鉄塔建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1996年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市伊賀良地区は飯田市街地の西部に位置し、中央道西宮線飯田インターチェンジが設けられてから、飯田市の玄関口としてめざましい発展を遂げています。また、古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を残しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のままで後世に伝えることが私たちの責務でしょう。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録にとどめることもやむを得ないものといえましょう。

中部電力株式会社では、平成6年度に増加する電力需要に対応するために、伊賀良中村地区に変電所と送電線鉄塔の建設を計画しました。電気は私たちの生活を営んでいくのに欠くことのできないエネルギーであるので、必要不可欠な事業といえます。しかし、当該事業地には中川遺跡・一ツ塚古墳が存在し、工事実施によって壊されてしまうおそれがでてきました。そこで、次善の策ではありますが、工事実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。

発掘調査は、中部電力株式会社からの委託を受けて、飯田市教育委員会が実施しました。調査成果は本文で述べられているとおりでありますが、調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査に当たって多大なご理解とご協力をいただいた中部電力株式会社と隣接地の方々、現地作業及び整理作業に従事された作業協力員の皆さんほか関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、ここに発掘調査報告書が刊行できますことに対して厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

飯田市教育委員会

教育長　小　林　恭之助

例　　言

1．本書は中部電力株式会社の変電所・送電線鉄塔建設に伴って実施された、飯田市中村「中川遺跡・一ツ塚古墳」の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、中部電力株式会社飯田支店からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．調査は、平成６年度に現地作業、平成７年度に整理作業及び報告書刊行を行った。

4．調査実施に当たり、基準点測量・航空測量・航空写真撮影・遺物写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。

5．発掘作業・整理作業に当たり、中川遺跡については遺跡略号としてＮＫＫを一貫して用いた。なお、遺跡の中心地番である1495-1を略号に続けて付した。

6．本報告書の記載順は住居址を優先した。遺構図は本文とあわせ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

7．本書は山下誠一が執筆した。なお、本文の一部につき小林正春が加筆・修正した。

8．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により山下誠一が行った。なお、土偶の実測は小島孝修氏の協力を得た。

9．本書の編集は調査員の協議により山下誠一が行った。

10．本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。

11．本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

序
例 言
Ⅰ 経 過……1
1．調査に至るまでの経過……1
2．調査の経過……1
1) 中川遺跡……1
2) 一ツ塚古墳……1
3．調査組織……2
1) 調 査……2
2) 指 導……2
3) 事務局……2
Ⅱ 遺跡の環境……3
1．自然環境……3
2．歴史環境……6
Ⅲ 調査結果……9
1．中川遺跡……9
1) 調査の方法と概要……9
2) 基本層序……9
3) 遺構と遺物……10
(1) 竪穴住居址……10
(2) 溝 址……11
(3) 土坑・柱穴……15
2．一ツ塚古墳……24
Ⅳ まとめ……27
1．中川遺跡……27
2．一ツ塚古墳……28
報告書抄録……53

挿 図 目 次

挿図1 中川遺跡・一ツ塚古墳調査位置図……4
挿図2 中川遺跡位置図及び周辺図……5
挿図3 中川遺跡全体図……8
挿図4 中川遺跡基本土層図……9

挿図５　１号住居址……10
挿図６　２号住居址・土坑65……11
挿図７　溝址１……11
挿図８　溝址２……12
挿図９　溝址３……13
挿図10　溝址４……14
挿図11　土坑・柱穴(1)……18
挿図12　土坑・柱穴(2)……19
挿図13　土坑・柱穴(3)……20
挿図14　土坑・柱穴(4)……21
挿図15　土坑・柱穴(5)……22
挿図16　土坑・柱穴(6)……23
挿図17　一ツ塚古墳調査位置図……24
挿図18　一ツ塚古墳周辺図及び全体図・穴……25

図　版　目　次

第１図　溝址３・４出土土器……29
第２図　土坑出土土器……30
第３図　土坑・遺構外出土土器……31
第４図　溝址・土坑出土石器……32
第５図　土坑出土石皿……33
第６図　溝址３出土土偶……34

写真図版目次

図版１　中川遺跡遠景（南東から）　中川遺跡近景（北西から）　中川遺跡近景（南西から）……35
図版２　１号住居址　１号住居址炉址　１号住居址有肩扇状形石器……36
図版３　２号住居址礫出土状態　２号住居址……37
図版４　溝址１（東から）　溝址２（北西から）　溝址３（南から）　溝址３（北から）……38
図版５　溝址４（南から）　溝址４（北から）　溝址３・４（北から）……39
図版６　土坑３土器出土状態　土坑22石皿・礫出土状態　土坑59石皿・礫出土状態……40
図版７　東側調査区南部土坑・柱穴（西から）　東側調査区南部土坑・柱穴（東から）
東側調査区中央部土坑・柱穴（南西から）……41
図版８　東側調査区（南西から）　東側調査区（北から）……42
図版９　西側調査区（南東から）　西側調査区（北から）……43
図版10　東側調査区（上空から）　東側調査区（斜め上空東から）……44

図版11　西側調査区（上空から）　西側調査区（斜め上空東から）……45
図版12　溝址３出土土偶正面　同左側面　同裏面　同右側面 ……46
図版13　１号住居址出土石器　土坑３出土石器　土坑３出土石器　土坑６出土石器
土坑18出土石器　土坑20出土石器……47
図版14　土坑22出土石器　土坑60出土石器　土坑62出土石器　溝址１出土石器
溝址４出土石器　溝址４出土石器……48
図版15　中川遺跡重機による拡張スナップ　中川遺跡溝址の掘り下げスナップ
中川遺跡ラジコンヘリスナップ……49
図版16　一ツ塚古墳近景（北から）　一ツ塚古墳調査地近景（南から）……50
図版17　一ツ塚古墳穴　一ツ塚古墳トレンチ（南から）　一ツ塚古墳トレンチ（北から）……51
図版18　一ツ塚古墳調査区全景（西から）　一ツ塚古墳調査地全景（東から）
一ツ塚古墳調査地全景（南西から）……52

Ⅰ 経　過

1．調査に至るまでの経過

中部電力株式会社が飯田市伊賀良中村地籍に変電所・送電線鉄塔の建設を計画し、平成5年8月6日付で開発に伴う埋蔵文化財発掘調査協議依頼書が提出された。変電所建設予定地は埋蔵文化財包蔵地中川遺跡隣接地であり、送電線鉄塔予定地は一ツ塚古墳及び中村大畑遺跡隣接地であった。いずれも遺跡の範囲が及ぶことが考えられたため、何等かの保護措置が必要であった。そこで、中川遺跡隣接地は平成6年1月31日、中村大畑遺跡隣接地は平成6年2月8・10日に、遺跡の状況を確認するための試掘調査を実施した。その結果、中川遺跡隣接地から弥生時代の竪穴住居址等を検出し、大畑遺跡隣接地は遺跡範囲外であることを確認した。そうした経過をふまえて、平成6年3月11日に、中部電力株式会社・長野県教育委員会・飯田市教育委員会の3者による保護協議を実施した。中川遺跡隣接地については、遺跡範囲が当該地まで広がり、一ツ塚古墳隣接地については、古墳周溝が工事予定地にかかるおそれがあるので、いずれも発掘調査を実施して記録保存をはかることとした。その後、中部電力株式会社と飯田市教育委員会の2者で、本調査や整理作業・報告書刊行の時期や費用について協議を重ね、平成6年度に本調査、平成7年度で整理作業を実施して報告書を刊行することとなった。

2．調査の経過

(1) 中川遺跡

中川遺跡は、用地内で調査の土を処理しなければならないことから、2回に分けて調査する必要があった。平成6年6月21日から東側の調査区を重機により拡張して調査を開始する。順次遺構を検出・調査して、6月30日には測量を除いた作業が終了した。

7月7日に西側の調査区を拡張するために重機、7月8日には調査の終了した一つ塚古墳から発掘器材・作業員を導入して調査を再開した。溝址等の遺構を掘り下げて、写真撮影等を済ませ、8月5日には測量をのぞいた現場におけるすべての作業が終了した。

平成7年度は、飯田市考古資料館において出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物実測・写真撮影作業、第2原図の作成・トレース・版組み等を行い、本発掘調査報告書を作成した。

(2) 一ツ塚古墳

平成6年6月30日に中川遺跡から発掘器材を移動し、7月1日から調査を開始する。調査対象箇所には周溝等古墳関連遺構は認められず、7月8日には現場におけるすべての作業が終了した。

平成7年度は、飯田市考古資料館で図面・写真等の整理を実施して、本発掘調査報告書を作成した。

3．調査組織

(1) 調　査

調査担当者　山下　誠一

調　査　員　小林　正春　佐々木嘉和　吉川　豊　馬場　保之　吉川　金利　福澤　好晃
下平　博行　伊藤　尚志

作　業　員　新井　幸子　市瀬　房吉　伊坪　節　井上　恵資　井上　晃一　太田　沢男
恩沢不二子　金井　照子　金子　正子　金子　裕子　唐沢古千代　北沢　裕
北原たせ子　木下　早苗　櫛原　勝子　熊谷　義章　熊谷　芳三　小池金太郎
小池千津子　小平不二子　小林　千枝　斉藤　千里　斉藤　徳子　榊原　政夫
佐々木文茂　佐々木真奈美　佐々木美千枝　佐藤　喜代　佐藤知代子　清水　三郎
清水　光朗　代田　和登　関島真由美　瀬古　郁保　塚原　次郎　仲田　昭平
丹羽　啓子　丹羽　由美　西塚　洋子　服部　光男　林田　加代　林田　諭
久田　誠　平栗　陽子　広井　保　福沢　育子　福沢　幸子　古根　素子
細田　七郎　牧内　郁代　牧内喜久子　牧内　八代　増山　局武　松井　明治
松下　成司　松下　直市　松下　真幸　松下　光利　松村かつみ　松本　幸子
三浦　厚子　南井　規子　宮下　貞一　森藤美知子　柳沢　謙二　山田　康夫
吉川　和夫　吉川紀美子　吉川　正実　吉沢佐紀子

(2) 指　導

長野県教育委員会文化課

(3) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

横田　　穆（社会教育課長）
小林　正春（社会教育課文化係長）
吉川　　豊（　〃　文化係）
山下　誠一（　〃　〃　）
馬場　保之（　〃　〃　）
吉川　金利（　〃　〃　）
福澤　好晃（　〃　〃　）
下平　博行（　〃　〃　）
伊藤　尚志（　〃　〃　）
岡田　茂子（　〃　社会教育係）

Ⅱ　遺跡の環境

1．自然環境

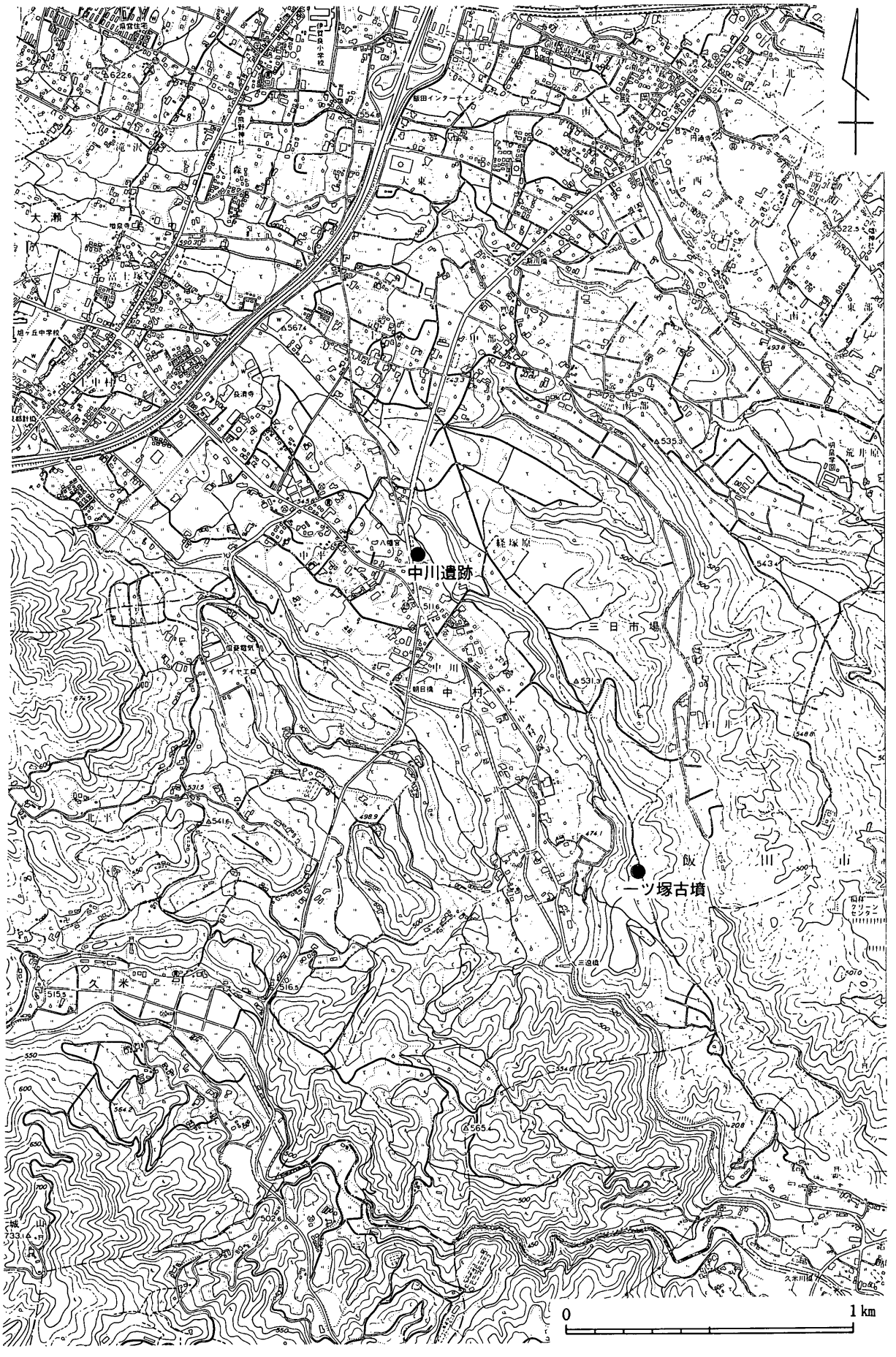
伊賀良地区は飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は鼎地区、東側は松尾・竜丘地区、南側は山本・三穂地区に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川に平行する河岸段丘地形を特徴とするが、両山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成された結果であり、複雑な段丘地形を呈している。

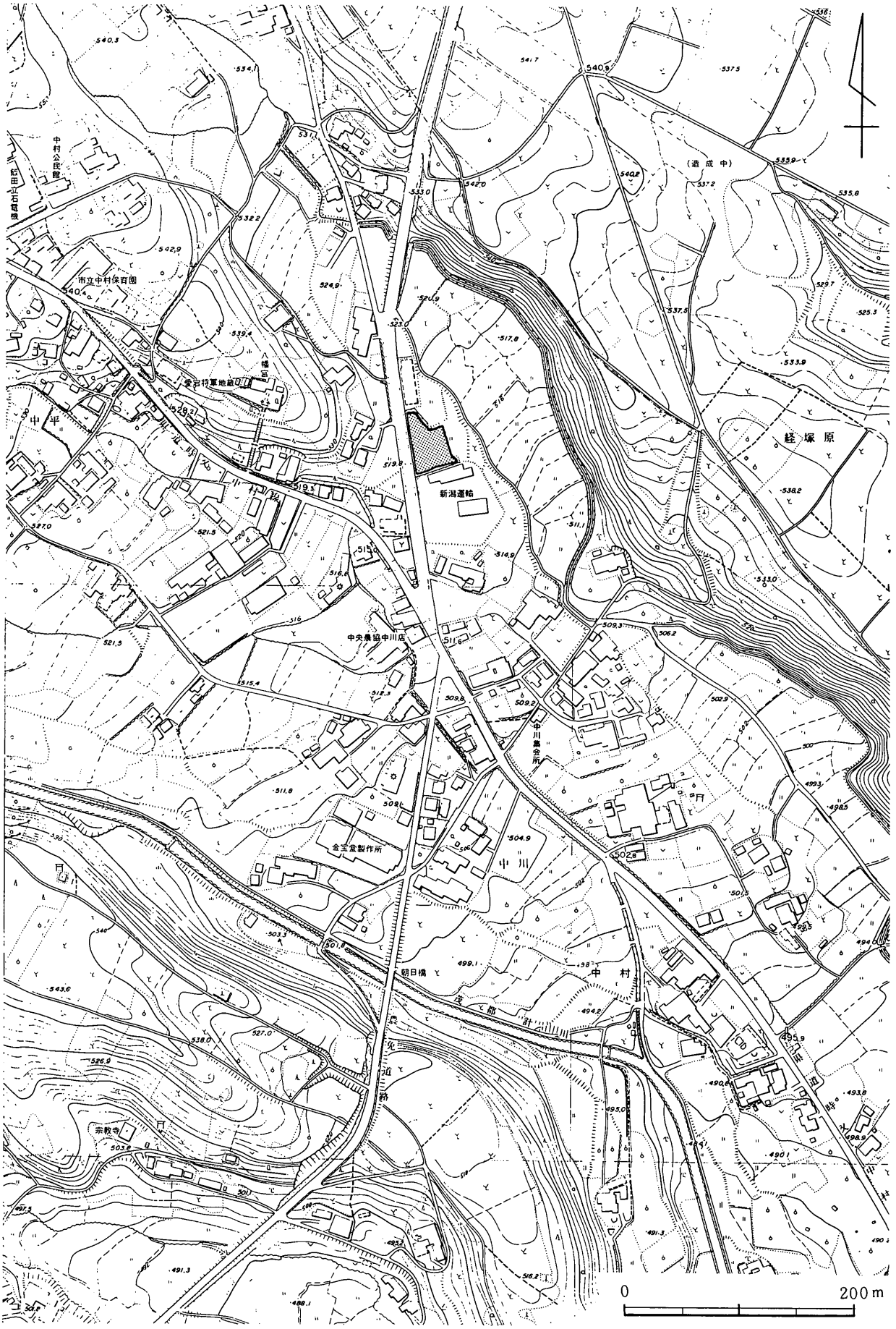
伊賀良地区の場合、西側と東側で大きく地形が変化している。西半は中央アルプスの前山である笠松山（1,271m）・高鳥屋山（1,397m）東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川をはじめ、笠松山・高鳥屋山から流れ出す入野沢川・南沢川・滝沢川・新川等の河川によって形成された広大な扇状地が広がる。扇端はおおむね北方地籍では新井付近、大瀬木で伊賀良小学校付近、中村の長清寺付近であり、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。扇端の一部は前述の線を大きく越えて東側に伸びており、下殿岡地籍まで達するものもある。扇端付近では通例湧水が豊かであるが、この扇状地が小河川により幾重にも複合して形成されているため、さらに湧水に恵まれ、今日でも横井戸を利用している住宅がみられる。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は現在は堆積作用より下谷作用に転じているが、浸蝕力は弱く、開析谷の規模は比較的小さい。これに対し、地区の東側は基本的には高位の段丘面を占めており、扇端から離れるほど地下水位が低くなる。古代末以来、この高燥な地帯への井水の開削が繰り返し行なわれ、大井をはじめ多くの井水が開けられているほか、地区内の大小河川には人為的な改変が加えられてきた。

中川遺跡・一ツ塚古墳は飯田市伊賀良地区南部に所在する。伊賀良地区には前述したように中央アルプス前山より大小の河川が流れ出しており、南部には茂都計川・臼井川等がある。中川遺跡は茂都計川の浸蝕によって開析された幅の広い浅い谷に立地し、現河床の北側に細長い範囲を占めている。北西側に縄文時代後期の好資料が出土した中村中平遺跡、南東側に中川下遺跡が隣接する。遺跡北側は茂都計川の浸蝕による崖となっており、崖下には細長く湿地帯が広がっている。今次調査地は中川遺跡の北部に位置し、崖下の湿地帯に北面し南に緩やかに傾斜している。現状は傾斜を造成して水田としており、地形改変を受けている。

一ツ塚古墳は、北側を臼井川、南側を茂都計川に浸蝕されて尾根状に残った段丘面に立地し、尾根の北西側は痩せ尾根となっており、南側は中村大畑遺跡が隣接する。古墳周辺は幅150m程の平坦面が残っており、平坦面には畑が作られているが、周辺は雑木林が広がっている。この雑木林は飯田市の天然記念物「ギフチョウ」の繁殖地でもある。



挿図１　中川遺跡・一ツ塚古墳調査位置図



挿図２　中川遺跡調査位置図及び周辺図

2．歴史環境

伊賀良地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、学術調査による立野・山口・西の原各遺跡、中央自動車道建設にかかる与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三壷渕・上の金谷各遺跡、一般国道153号飯田バイパス建設にかかる殿原・八幡面・小垣外各遺跡、広域農道西部山麓線建設にかかる飯田垣外・火振原・梅ヶ久保・細田北・大原・直刀原各遺跡、諸開発に伴う中島平・宮ノ先・酒屋前・鳥屋平・下原・高野・公文所前・中村中平等の各遺跡がある。

こうした文化財に表われた先人達の足跡は縄文時代早期までさかのぼる。立野遺跡や山口遺跡といった縄文時代早・前期の遺跡は主に笠松山麓の比較的標高の高い所に立地している。前期終末では辻垣外・殿原遺跡等扇状地の扇端付近の遺跡で竪穴住居址が調査されている。中期の遺跡は伊賀良地区の広範に分布しており、中央自動車道・西部山麓線路線にかかる扇状地上の諸遺跡や下原・公文所前といった段丘上の遺跡がある。殊に下原遺跡では該期の中心的役割を果たしたと考えられる大集落の一画が調査されている。後期中葉から晩期にかけては、茂都計川に面した中村中平遺跡で、配石址・竪穴住居址・配石墓等の遺構や土偶・土製耳飾り・石棒・石剣を含むの多量の遺物が調査され、不明な点の多かった該期の様子が明らかとなった。また、酒屋前・辻垣外・殿原遺跡で断片的な資料ではあるが、遺構・遺物が確認されている。

弥生時代においては、前期・中期と後期では遺跡立地が異なり、前者は天竜川に近い低位の段丘面を主な生活域としている。後者になると、高位の段丘面や扇状地に遺跡が拡大し、伊賀良地区でも調査例が増す。これまで調査された遺跡としては大東・上の金谷・酒屋前・滝沢井尻・宮ノ先・中島平・中村中平遺跡等がある。該期の経済基盤としては、扇状地末端の湧水線および西方前山から東流する大小河川を利用した水田経営と高位段丘上での畑作と考えられる。中でも、殿原遺跡ではこれまで90軒にのぼる竪穴住居址が調査される等、大規模な集落が営まれていたことが判明している。また、細田北遺跡では標高700mを超える高所から3軒の竪穴住居址が発見されており、人口の爆発的な増加とこうした高所にまで生産基盤を拡大するまでに至る生産力の向上を看取できる。

古墳は伊賀良地区では52基が確認されているが、現存するものは9基にすぎない。隣接する竜丘・松尾地区に比べて数も少なく、いずれも規模の小さい円墳である。中村地区には大名塚が現存し、ほかに消滅したものとして中村狐塚古墳・寺畑古墳・宮原2号古墳等がある。また、同時代の集落址の調査は少なく、前期後半の上の金谷遺跡、後期の三壷渕・中島平遺跡・中村中平遺跡が調査されているのみである。遺跡数も前時代に比べると著しく減少しており、湧水・湿地を控えた集落の展開が考えられる。また、地区内北方地籍には条里が敷かれたとも指摘されており、水田経営の定着した姿を想定することができよう。

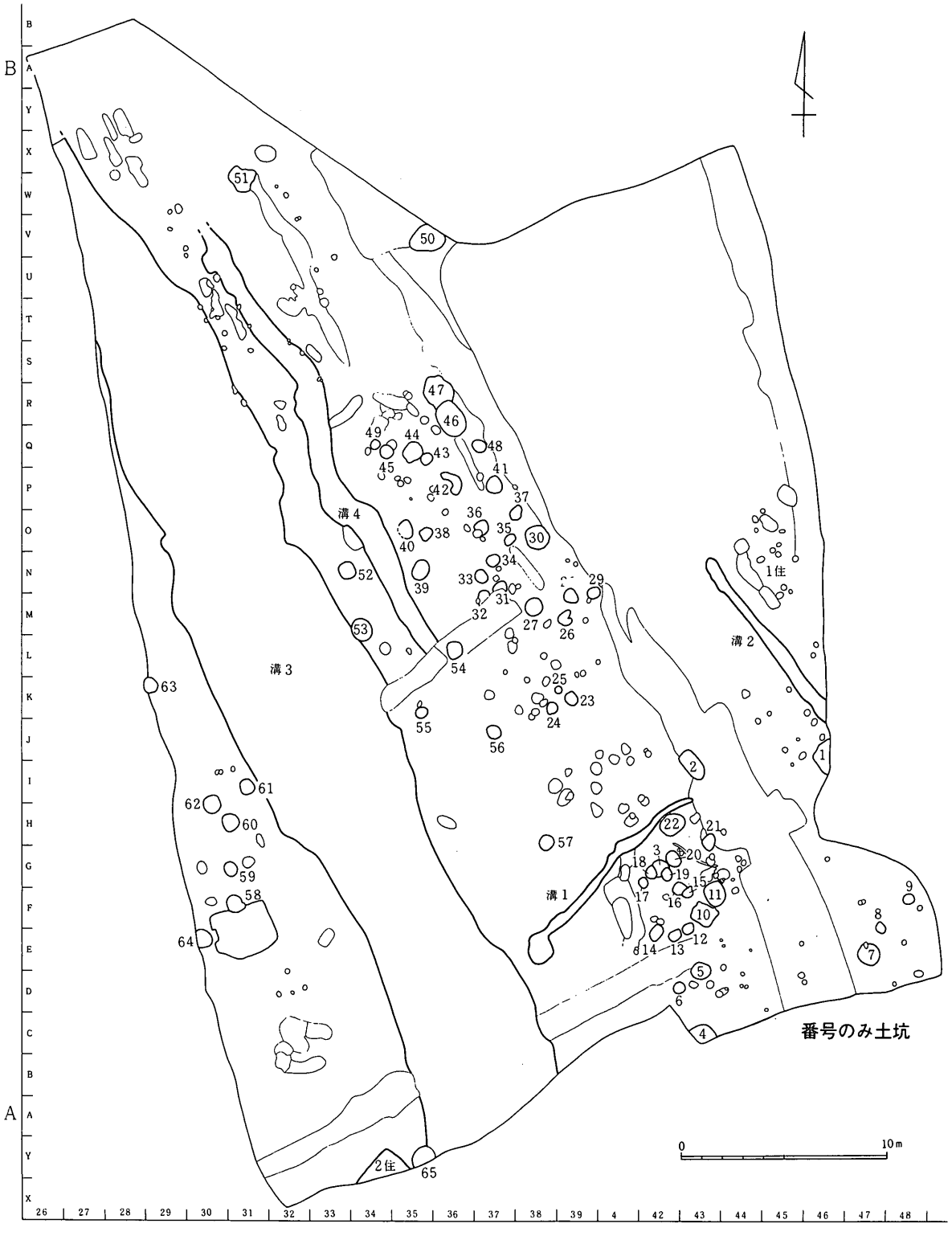
奈良時代については、具体的な遺構・遺物の調査例は中村中平遺跡のみであり、掘立柱建物址が単独で調査されたのみで、詳細は不明である。地区内には、古代東山道の経路および「育良駅」の推定地や、荘園を構成する村落の起源等に関連すると思われる箇所があり、重要な役割を果たした地区ということができる。

平安時代については、その末期には伊賀良庄の名が文書に登場する。そのなかには中村・久米・川路・殿岡が含まれることが文献等により明らかにされており、当地区がその中心的な位置を占めたことが考えられる。当地区における大規模な井水開発の歴史は、この時代にはじまるともいわれている。殿原遺跡の調査結果はこうした説をある程度裏付けるものといえる。一方、これまで実施された発掘調査の結果、六反田・滝沢井尻・小垣外・三壷渕・上の金谷・宮ノ先・公文所前遺跡等地区内のほぼ全域にわたり、集落址の一部が調査されている。伊賀良庄の成立がどこまで遡るかは不明であるが、この時代の集落が前時代よりも増加することは、この地区の開発が一段と進んだ証左であろう。隣接する山本久米地区には真言宗の古刹光明寺がある。胎内に「保延六年」(1140年) の銘を持つ薬師如来坐像があることから、寺の創建はこれより遡ると考えられ、伊那谷の中ではいちはやく中央の文化を取り入れた先進地域の一つであったと思われる。また、さらに、この時代には三日市場地籍に須恵器を生産した土器（かわらけ）洞窯跡があり、ここで生産された須恵器が下伊那全域に分布するなど、手工業生産の発達がみられる。

中世においては鎌倉時代には北条時政が伊賀良庄地頭であり、以後一族の江馬氏がこれを継いだ。その地頭代が地区内に居を構えた可能性は強く、鎌倉末期には荘園を自領化していたことが三浦和田文書に窺える。この時代の文化財としては、藤原様式の流れを汲む鎌倉初期の光明寺の阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）がある。

北条氏の滅亡後、信濃守護職小笠原氏は伊賀良庄を与えられ、その下で伊賀良地区の開発は急速に進んだとされる。地区内の井水の大半はこの時代の開発と考えられ、小笠原氏の勢力伸長の基盤として当地区が大きな役割を果たしたといえる。室町時代中期以降、小笠原氏内訌に伴い松尾城・鈴岡城の支城が各地に築かれ、地区内には下の城跡・桜山城跡がある。

中川遺跡は、今次調査地南側250m離れた地点を平成３年10月に民間開発に先立って試掘調査が実施されているが、本格的な発掘調査は今回が初めてである。



挿図３　中川遺跡遺構全体図

Ⅲ　調査結果

1．中川遺跡

1）調査の方法と概要

調査地の調査前は5枚の水田として利用されていた。その中の東側2枚の水田は休耕田としてアスパラガスが栽培されており、できる限り収穫したいというのが地権者の要望であった。そこで、まずそれ以外の部分を対象として調査区を設定して調査を進め、遺構などの状況によって東側を調査するかの判断をすることとした。

測量用の基準杭の設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、㈱ジャステックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については、『中村中平遺跡』に詳しく記述されているので、そちらを参照していただきたい。本調査地の区画はＬＣ－94　1-28である。

今次調査で検出された遺構は以下のとおりである。

竪穴住居址……2軒　　溝　　址……4本

土　　坑……66基　　柱　　穴……多数

2）基本層序

水田の造成を受けており、比較的残りのよい調査地南側土坑4東側の南に面する壁面の 層序を挿図4で示した。

1層：灰色土、水田の耕土である。

2層：灰色土（黄色土混じり）、水田造成の埋土である。

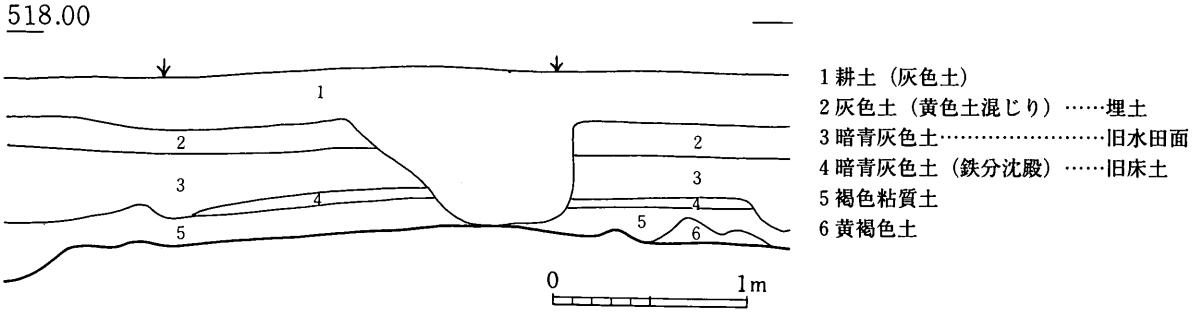
3層：暗青灰色土、旧水田面である。

4層：暗青灰色土（鉄分沈殿）、旧水田の床土である。

5層：褐色粘質土

6層：黄褐色土

遺構検出面は5層下の粘質の強い黄色土で、比較的容易に遺構は検出できた。



挿図4　中川遺跡基本土層図

3) 遺構と遺物

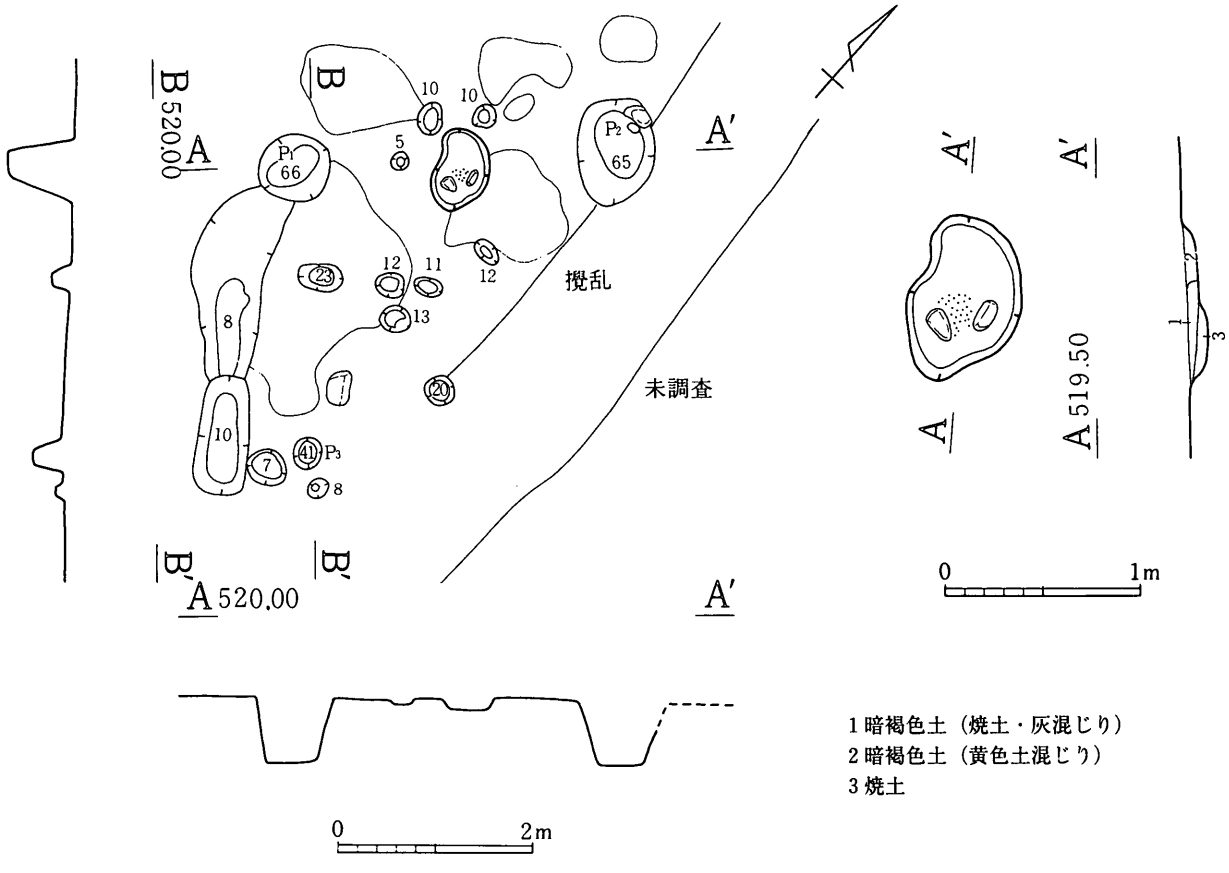
(1) 竪穴住居址

① 1号住居址（挿図5、第4図）

遺構 調査区東端中央部ＡＮ44を中心にして検出した。水田の造成により壁面が削平されており、たたき状の床面から住居址であることを確認し、南東側が調査区域外のため、全体の4/5 程を調査した。南東側主柱穴は未調査部にかかって確認できなかった。規模は不明の竪穴住居址で、主軸方向はＮ47°Ｗを示す。床面は細線で示した内側がたたき状に堅く極めて良好であるが、水田造成による削平の攪乱を受けており、残存部分は少ない。主柱穴はＰ1 ～Ｐ3 で、その他の穴は間仕切り等の用途が考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する地床炉で、83×60cmの楕円形に掘り凹められ、南東側に炉縁石をハの字に置き、その周辺に焼土が認められた。

遺物 土器・石器があるが、その出土量は極めて少ない。直接本址に結び付く遺物はＰ2 西側床面上から出土した有肩扇状形石器であるが、調査中に紛失し、詳細を示すことはできなくなった。その他、縄文土器・打製石斧（４－１）・横刃型石器（４－４）がある。

出土遺物が少なく詳細な時期を示すことができないが、遺構の形態等から弥生時代後期に位置づけられる。



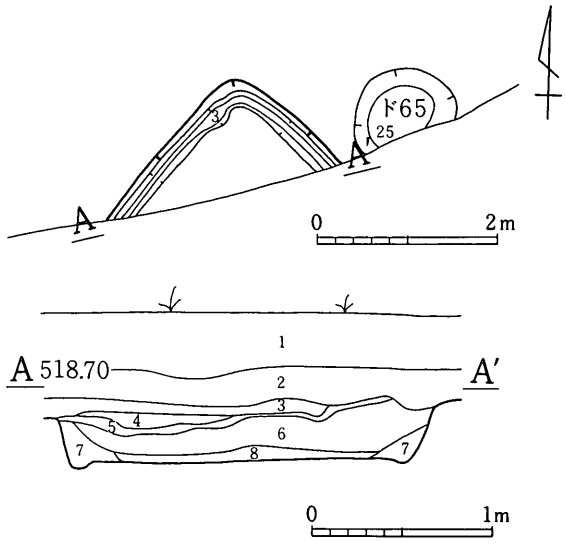
挿図5　1号住居址

② 2号住居址（挿図6）

遺構 調査区南西端ＢＹ34・35で検出した。南側が用地外で北隅と北西・北東壁の一部を調査したにとどまった。規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は33～25cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面直上の覆土中に焼土・炭が認められた。床面はたたき状に堅く良好である。壁面直下に周溝があり、幅24～12cm・深さ3cmを測る。

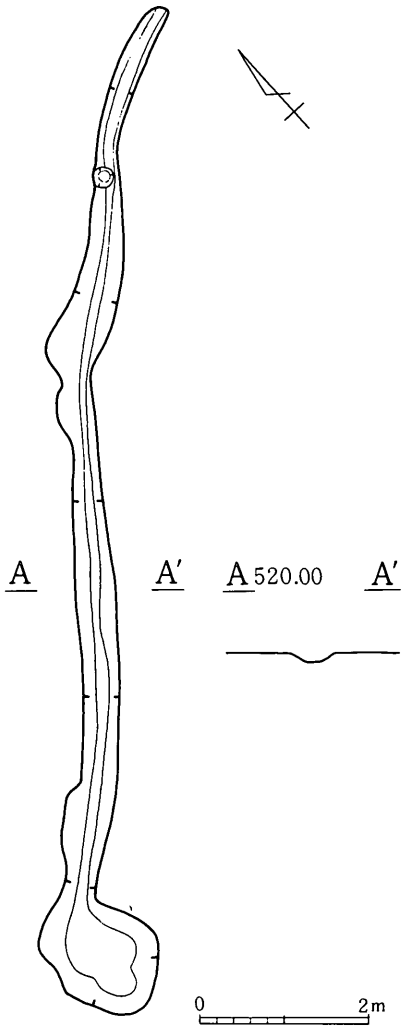
遺物 出土遺物は極めて少なく、縄文土器中期土器の小片が5点出土したのみで、本址に直接結び付く遺物はない。

遺構の形態等から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図6　2号住居址・土坑65

1灰色土（黄色土混じり）
2暗青灰色土
3黒褐色土
4黒褐色土（黄色土粒混じり）
5黒褐色土（黄色土粒混じり）鉄分沈殿層
6褐色土（黄色土粒混じり）
7黄色褐色土
8褐色土(黄色土・灰・焼土混じり)



挿図7　溝址1

(2) 溝址

① 溝址1（挿図7、第4図）

遺構 調査区南側ＡＥ38からＡＩ42にかけて検出した。調査延長は9.6mで、南西端で穴と重複する。覆土は暗灰色土のほぼ一層で、方向はN41° Eを示す。幅65～26cm・深さ24～5cmを測り、断面形は逆台形を示す。遺構の性格・用途は不明である。

遺物 縄文土器片14点と磨製石斧（4－2）・打製石斧3点がある。

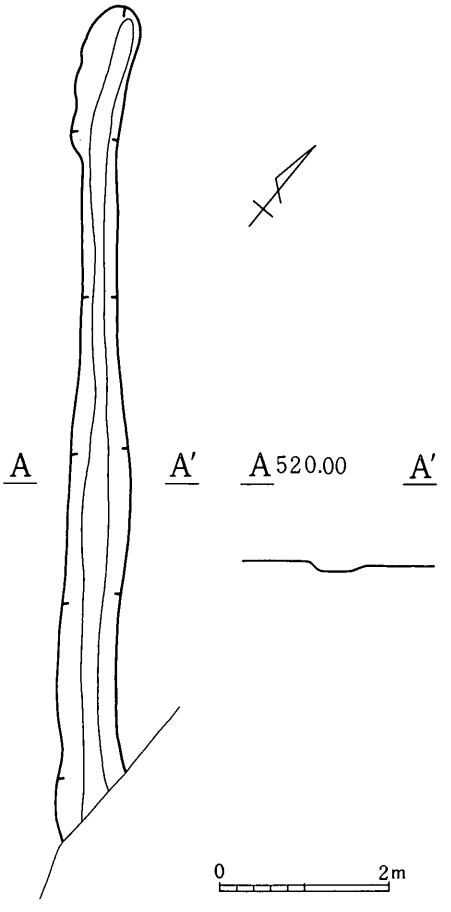
出土遺物は本址に直接結びつかないと考えられ、確定した時期を示すことはできないが、覆土の状況から判断すれば近世以降に位置づく可能性が高い。

② **溝址２**（挿図８）

遺構　調査区東端ＡＫ45からＡＮ42にかけて検出した。調査延長は9.7mで、南西側は未調査に延長する。灰色土のほぼ一層で、方向はＮ40°Ｗを示す。幅80～44cm・深さ19～９cmを測り、断面形は逆台形を示す。遺構の性格・用途は不明である。

遺物　出土遺物はない。

出土遺物がなく確定した時期を示すことはできないが、覆土の状況から判断すれば近世以降に位置づく可能性が高い。



挿図８　溝址２

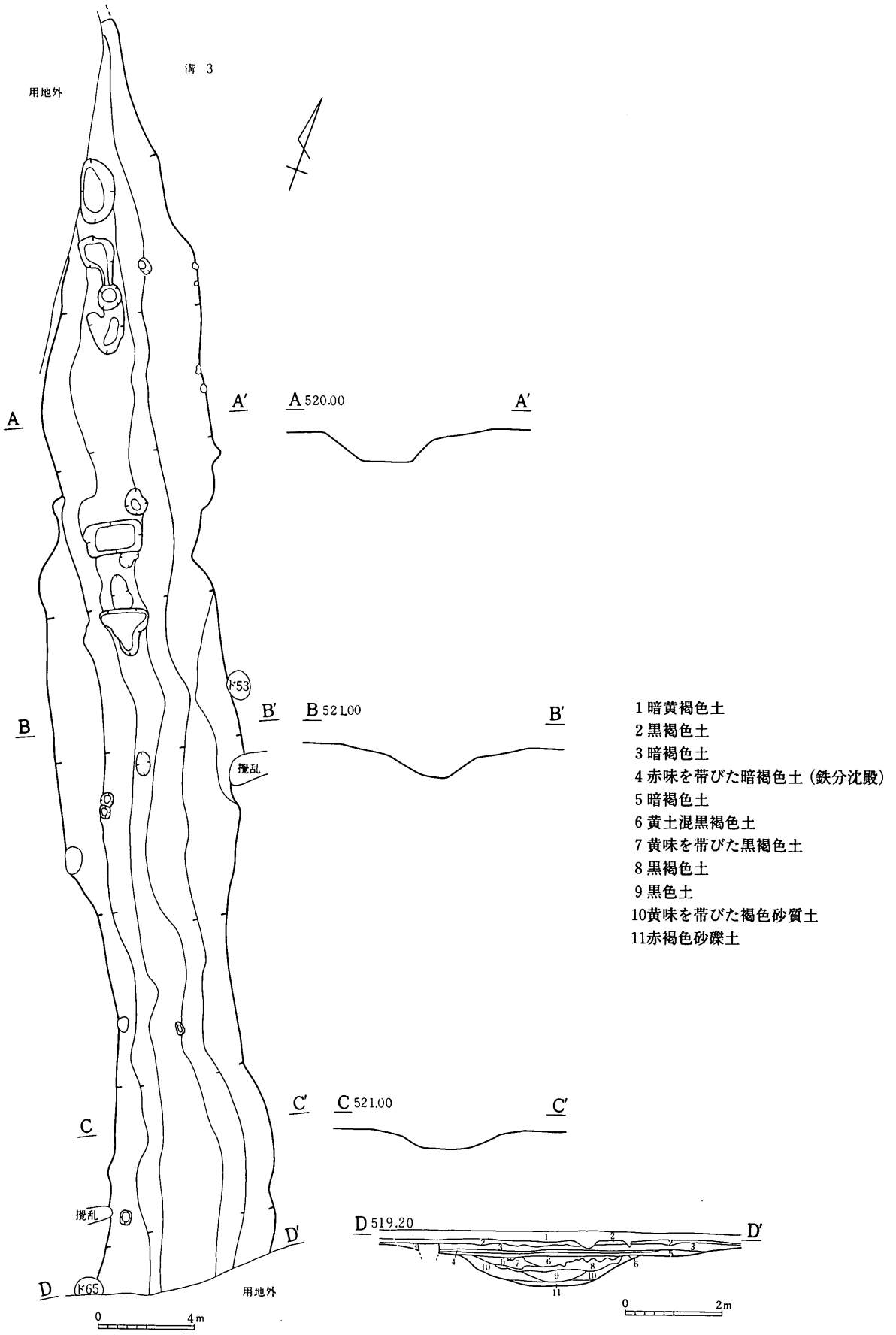
③ **溝址３**（挿図９、第１・４・６図）

遺構　調査区西側を南北方向に縦断する形で検出した。調査延長は53mで、南側・北西側の用地外に延長する。方向はほぼ直線的でＮ28°Ｗを示す。幅 7.6～4.7m・深さは144～61cmを測り、断面形は途中で稜をもつ逆台形をなす。底部は水流により抉れた箇所が認められ、壁面にも水流によって崩れたと考えられる幅がひろく膨らんだ箇所が認められる。覆土は自然の埋没による堆積をなしており、底は水が流れたことを示す砂礫土や砂土が認められた。

遺物　縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・中世陶磁器、打製石斧・横刃型石器・打製石錘・磨製石斧・敲打器、土偶等がある。この中で特筆すべき遺物に土偶（６－１）がある。脚部のみであるが、比較的大型で沈線で文様がつけられる。当地方では過去に出土例がなく類例に乏しい。

主体となるのは縄文時代中期中葉の遺物であるが、周辺からの流れ込みと考えられ、本址の時期を示すものではない。最も新しい時期の中世遺物は溝址上層から出土しており、埋没時期を示唆している。その中で器形が確定できる山茶碗碗（１－17）は鎌倉時代中頃に位置づくと考えられる。１点のみであり断定することはさけたいが、該期を前後する時期に溝が埋没したと想定できる。

溝の性格であるが、人為的に掘削された用水路と考えられる。平安時代末に始まる井水掘削によるものともいえるが、時期を断定するには材料が乏しい。特に、掘削年代を決める下層遺物が少なく、古墳時代から奈良時代までのものがあり、今一つ確定できないことが大きな要因となっている。


溝 3
用地外
A
A′
A 520.00
A′
B
B′
B 521.00
B′
P53
攪乱
C
C′
C 521.00
C′
攪乱
D
D′
D 519.20
D′
P65
用地外
0
4m
0
2m
1 暗黄褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 赤味を帯びた暗褐色土（鉄分沈殿）
5 暗褐色土
6 黄土混黒褐色土
7 黄味を帯びた黒褐色土
8 黒褐色土
9 黒色土
10 黄味を帯びた褐色砂質土
11 赤褐色砂礫土

挿図9　溝址3

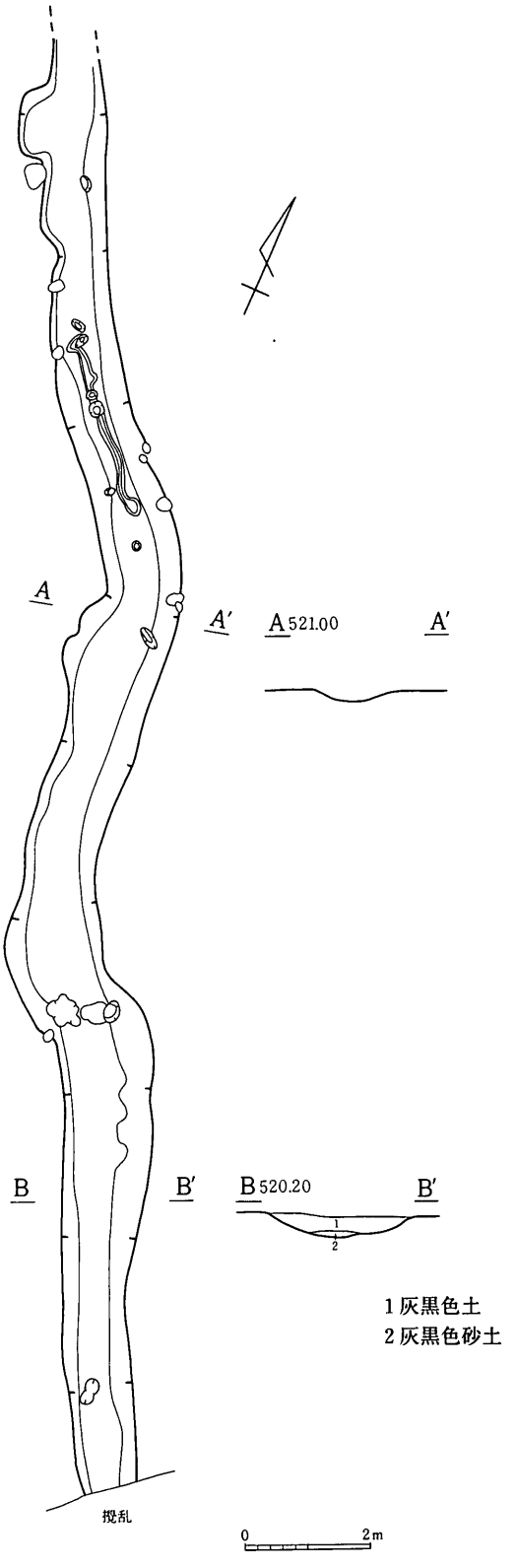
④ **溝址４**（挿図10、第４図）

遺構　調査区北西側中央部ＡＬ35からＡＶ31にかけて検出した。調査延長は22.8ｍで、両端とも水田造成による削平を受けていて検出できなかったが、両側に延長すると想定される。形状は途中で二箇所曲がって蛇行しており、方向はほぼＮ30°Ｗを示す。幅154～97㎝・深さ22～５㎝を測り、断面形は逆台形をなす。覆土は灰黒色土が主体となり、底部には灰黒色砂土と水流によって抉れた箇所が認められた。

遺物　縄文土器片・須恵器片・近世磁器片、打製石斧・打製石錘・横刃型石器・磨製石斧（４－３）が出土した。

主体となるのは縄文時代中期の遺物であるが、周辺からの流れ込みによると判断される。覆土や最も新しい遺物から、近世に位置づけられる。

遺構の状況から、自然の小川の旧流路と考えられる。



挿図10　溝址４

(3) 土坑・柱穴

土坑は番号を付したものが65基あり、個々の説明は省略して一覧表で表した。調査時に一貫した方針を欠いたので、その他の穴の中にも土坑とすべきものがあったにもかかわらず、すべてに番号が付されていない。

分布状況は、水田の造成で大きく削平を受けている北東側・北側・南西側にはみられない。そのほかの箇所はほぼ全面に分布するが、調査区中央部に多い傾向は指摘できる。比較的残存状態のよい南東側の状況をみれば、傾斜面となる南東端の部分は少なく、比較的平坦なその西側には多い傾向を指摘できる。この平坦面は遺跡東側に広がる湿地帯への斜面の肩にあたり、そうした場所が選ばれていると考えられる。

時期は、覆土の状況から近世以降と考えられる土坑２・46・47を除いてほとんどが縄文時代中期中葉と考えられる。詳細な位置づけができるほどの遺物の出土はないが、余り長期間にわたるものとは考えられない。それは、小破片が主体ではあるが、土坑から出土した土器にあまり様相の変化が認められないからである。特筆すべき土坑には、石皿や礫がいれられた土坑22・59・64がある。

出土遺物は土器・石器があり、出土量は少なく、何も出土しない土坑も多い。土器で主体となるのはいわゆる平出第３類Ａ式土器で、唯一図化できた個体（２－１）は藤内式土器と考えられる。石器は石皿を除けば土坑に直接結びつかない可能性があるが、図示した打製石斧・横刃型石器・すり石の他、使用痕は認められない黒曜石小片がわずかにあるのみである。

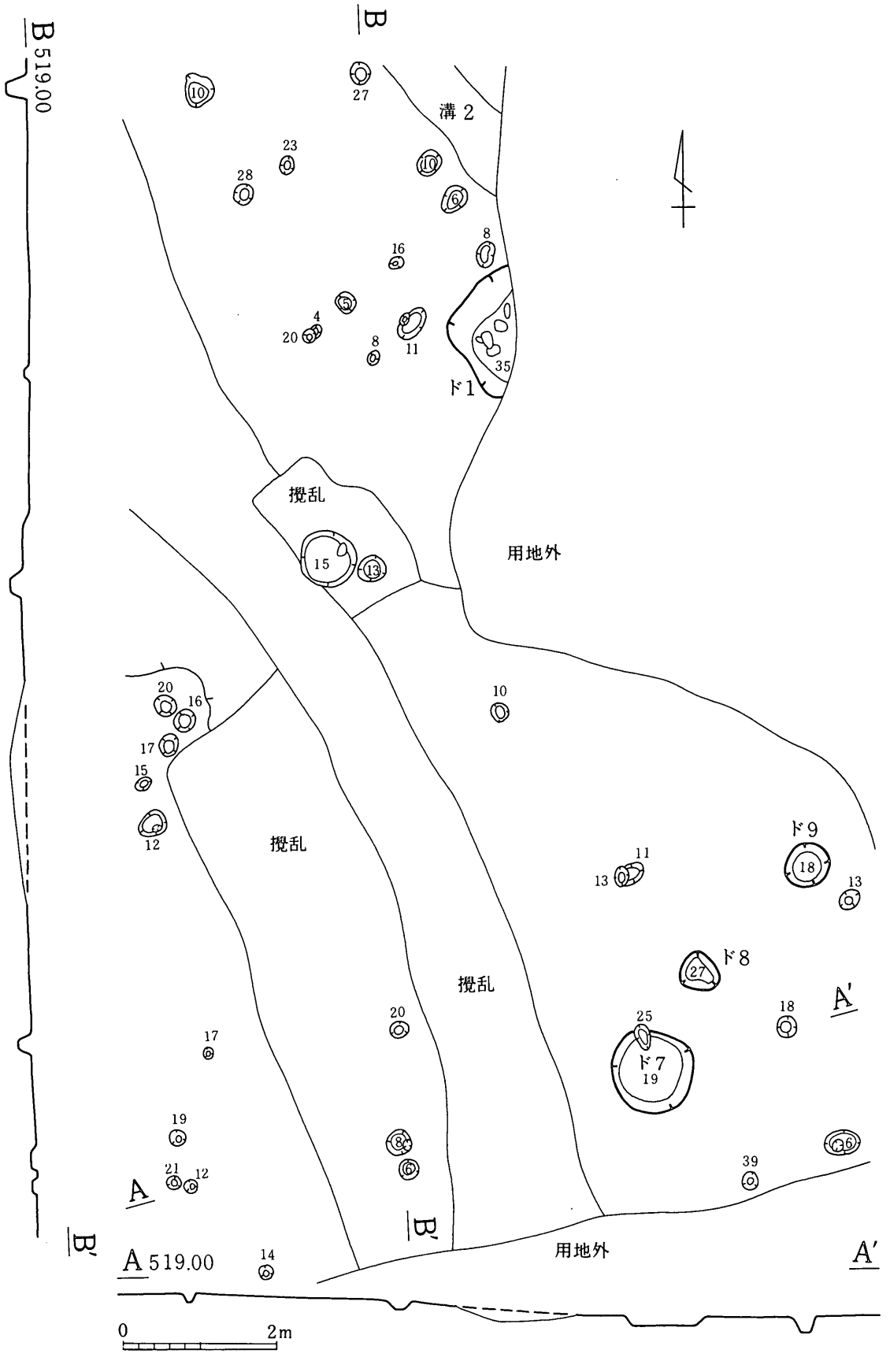
柱穴も土坑と同様に削平された箇所を除いてほぼ全域にから検出された。遺物の出土がないため、時期を決定することはできないが、覆土や遺構の状況から考えて、大半が中世に位置づくと考えられる。掘立柱建物址として把握できたかもしれないが、攪乱や削平もあり、柱穴としてとらえたのみである。

第１表　中川遺跡土坑観察表(1)

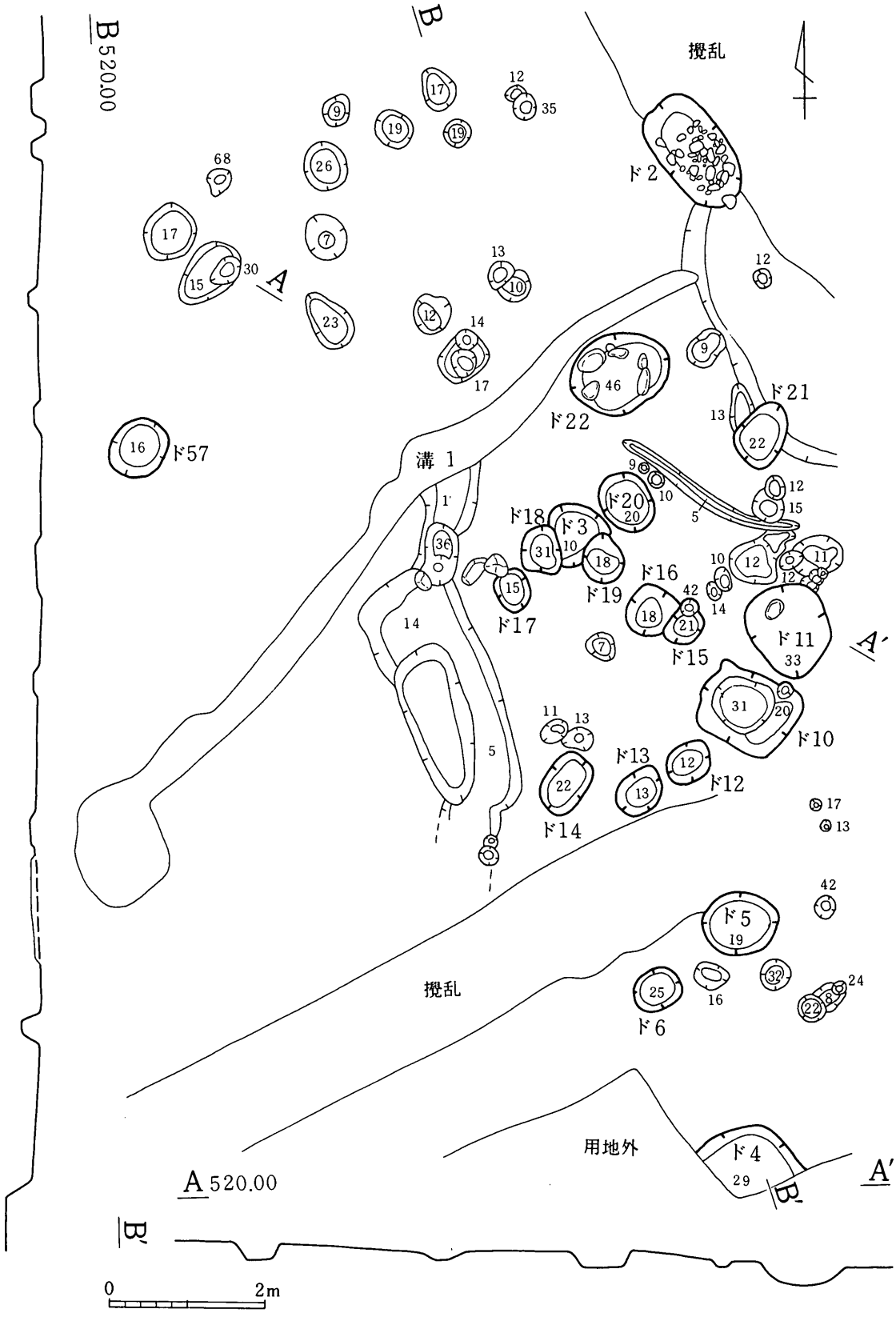
番号	図版No	検出位置	規模(長/短/深cm)	形　態	覆土	時代	重複遺構	備　考
1	挿図11	AI･J45	172×－×35	－	黒褐色土			東側用地外･礫
2	挿図12	AI･J42	152×98×－	長楕円形	灰色土	近世？		覆土中に礫
3	挿図12	AG41	82×82×10	－	褐色土	縄文中	土坑18･19	土器
4	挿図12	AC42	－×－×29	－	褐色土	縄文中		南側用地外
5	挿図12	AD･F42	97×80×19	楕円形	黒褐色土			
6	挿図12	AD41･42	60×52×25	楕円形	暗褐色土			
7	挿図11	AF46	52×43×19	楕円形	暗褐色土	縄文中	柱穴	
8	挿図11	AE47	25×23×18	円形	黒褐色土	縄文中		
9	挿図11	AF47	56×54×18	円形	褐色土			
10	挿図12	AF42	120×96×31	丸みを帯びた長方形	暗褐色土	縄文中		
11	挿図12	AF42	120×98×33	楕円形	黒褐色土	縄文中		
12	挿図12	AF42	59×52×12	楕円形	暗褐色土			
13	挿図12	AH41	65×53×13	楕円形	暗褐色土			
14	挿図12	AH41	82×50×22	丸みを帯びた長方形	褐色土	縄文中		
15	挿図12	AF42	52×43×21	楕円形	暗褐色土	縄文中		
16	挿図12	AG41	60×54×18	丸みを帯びた長方形	褐色土			
17	挿図12	AG41	48×22×15	楕円形	褐色土			
18	挿図12	AG41	53×51×31	不整形	褐色土			
19	挿図12	AG41	57×53×18	楕円形	褐色土			
20	挿図12	AG41	78×65×20	楕円形	暗褐色土			
21	挿図12	AH42	76×56×22	楕円形	暗褐色土			
22	挿図12	AH41	129×100×46	楕円形	黒褐色土	縄文中		石皿･礫
23	挿図13	AH39	65×55×12	楕円形	暗褐色土			
24	挿図13	AH38	56×52×9	円形	暗褐色土		柱穴	
25	挿図13	AK39	36×34×20	不整形	褐色土			
26	挿図13	AJ39	77×68×9	楕円形	黒褐色土	縄文中		
27	挿図13	AJ38	89×80×25	楕円形	暗褐色土			
28	挿図13	AJ･k39	74×64×22	楕円形	褐色土			
29	挿図14	AK39	65×55×28	楕円形	褐色土			
30	挿図13	AL38	113×113×24	円形	黒褐色土			礫
31	挿図13	AN37	76×53×24	楕円形				
32	挿図13	AL･N37	52×46×15	楕円形				
33	挿図13	AN37	67×58×12	楕円形	褐色土			

第２表　中川遺跡土坑観察表(2)

番号	図版No	検出位置	規模(長/短/深cm)	形　態	覆土	時代	重複遺構	備　考
34	挿図13	AN37	64×57×14	円形	褐色土			
35	挿図13	AO37	64×42×－	楕円形				
36	挿図13	AO37	68×60×14	楕円形	褐色土			
37	挿図13	AO37･38	75×52×14	不整形	暗褐色土			
38	挿図13	AO35	69×53×23	楕円形	楕円形			
39	挿図13	AN35	106×81×22	楕円形	楕円形			
40	挿図13	AO35	85×80×15	楕円形	楕円形	縄文中		
41	挿図13	AP37	41×38×13	円形	円形	縄文中		
42	挿図13	AP36	122×47×8	不整形	褐色土			
43	挿図13	AQ35	57×53×11	不整円形	暗褐色土			
44	挿図13	AQ35	96×85×22	不整円形	黒褐色土			
45	挿図13	AQ34	68×64×12	円形	暗褐色土			
46	挿図14	AR36	165×125×20	楕円形	暗灰色土	近世？		礫
47	挿図14	AR36	140×140×16	不整円形	暗灰色土	近世？		礫
48	挿図13	AQ37	70×60×18	楕円形				
49	挿図13	AQ34	48×45×20	丸みを帯びた三角形	暗褐色土	縄文中		
50	挿図14	AV35	183×124×59	丸みを帯びた三角形	暗褐色土	縄文中		礫
51	挿図15	AW32	135×134×46	不整形	黒褐色土			礫
52	挿図13	AN33	80×80×14	円形	暗褐色土			
53	挿図13	AJ34	116×96×48	楕円形	褐色土			
54	挿図13	AL36	84×76×15	不整円形	黒褐色土			
55	挿図13	AK35	64×52×13	楕円形				
56	挿図13	AJ37	64×63×13	円形	黒褐色土			
57	挿図12	AH38	72×66×17	円形				
58	挿図16	AF32	82×70×19	丸みを帯びた台形	褐色土	縄文中		
59	挿図16	AG32	64×56×29	円形	褐色土	縄文中		
60	挿図16	AH31･32	88×84×6	円形	褐色土	縄文中		
61	挿図16	AI32	78×73×11	円形	褐色土			
62	挿図16	AH･I30	88×84×16	円形	褐色土			
63	挿図16	AK29	－×75×47	暗褐色土	暗褐色土			
64	挿図16	AE30	－×88×19	褐色土	褐色土			礫
65	挿図6	BY65	105×－×27	－				



挿図11　土坑・柱穴(1)

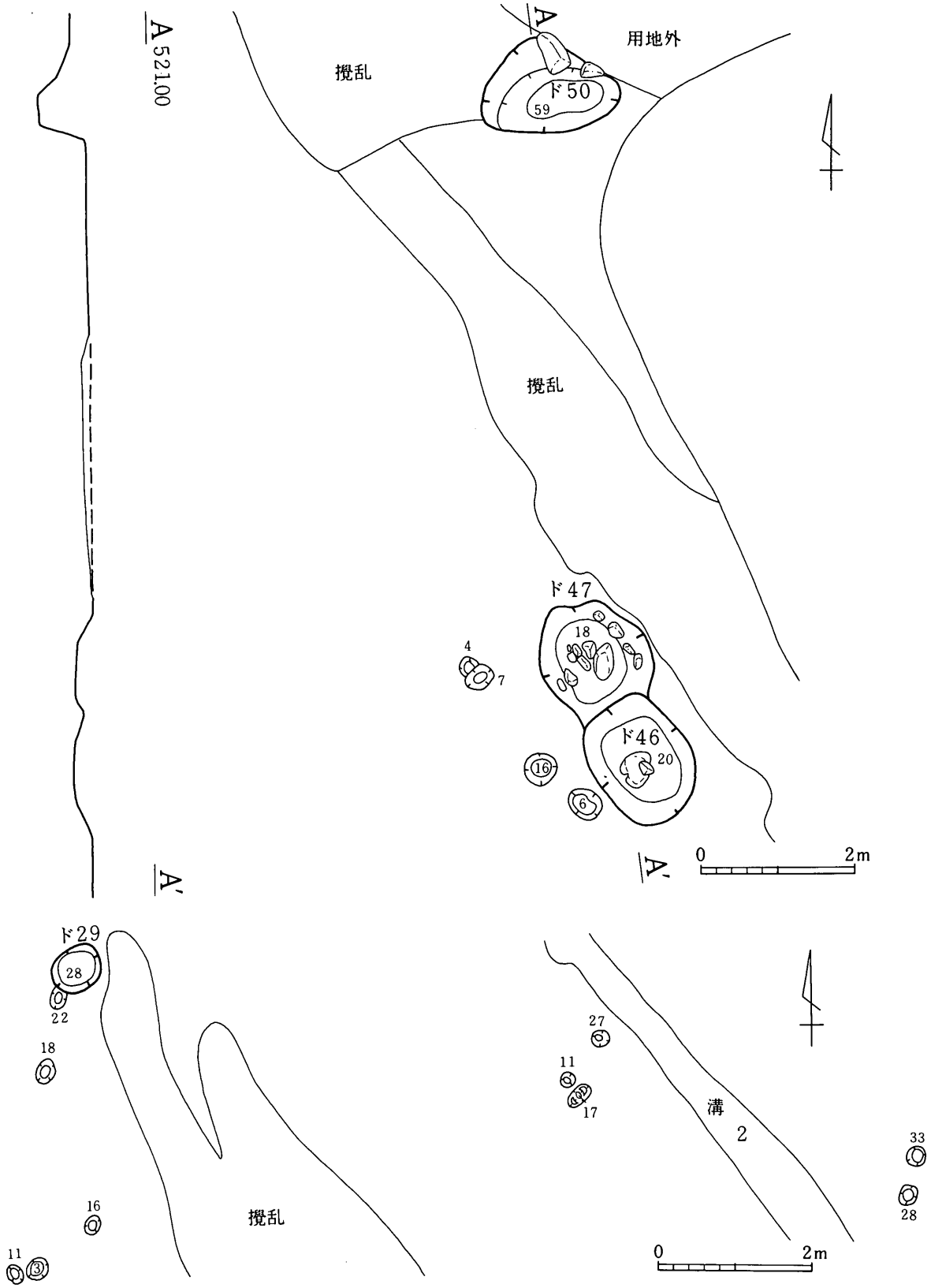


B 520.00
B
A
A'
B'
A 520.00
攪乱
ド2
ド21
ド22
ド57
溝 1
ド20
ド18
ド3
ド19
ド16
ド17
ド15
ド11
ド10
ド13
ド12
ド14
ド5
ド6
ド4
用地外
0
2m

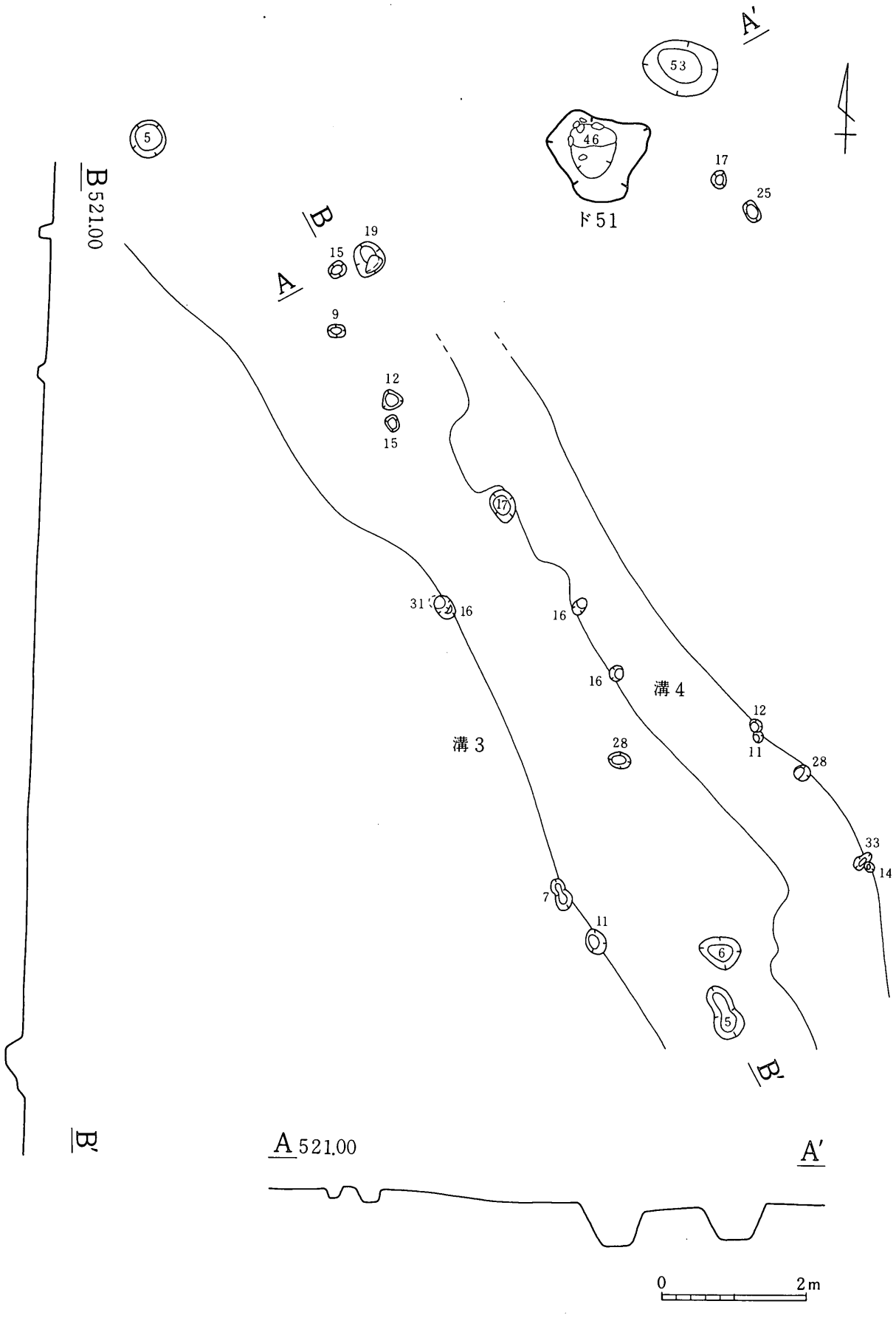
挿図12　土坑・柱穴(2)

B
B 521.00
ド49
ド45
ド44
ド43
ド48
攪乱
ド42
ド41
ド37
ド36
A
ド40
ド38
ド35
ド30
A′
ド34
溝 4
ド52
ド39
ド33
ド31
ド32
攪乱
ド28
ド27
ド53
ド54
ド26
溝 3
ド25
ド23
ド24
ド55
ド56
B′
A 521.00
A′
0
2m

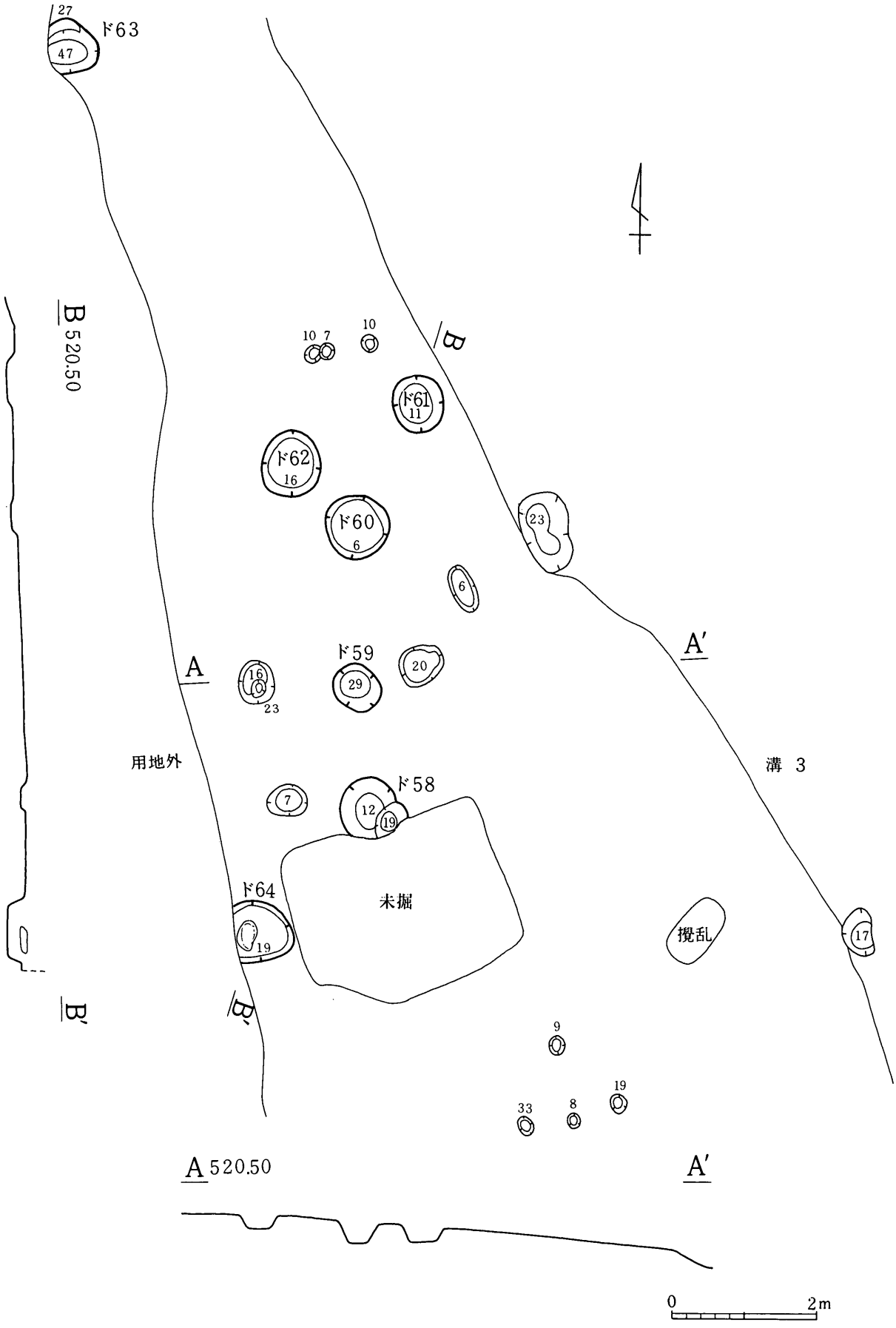
挿図13　土坑・柱穴(3)


A
A 521.00
A'
撹乱
用地外
ド50
59
撹乱
ド47
18
4
7
ド46
20
16
6
0
2m
ド29
28
22
18
16
撹乱
11
3
27
11
17
溝
2
33
28
0
2m

挿図14　土坑・柱穴(4)


A'
53
46
ド51
17
25
5
B 521.00
B
19
15
A
9
12
15
17
31
16
16
16
溝 4
12
11
溝 3
28
28
33
14
7
11
6
5
B'
B'
A 521.00
A'
0
2m

挿図15　土坑・柱穴(5)


ド63
27
47
B
B 520.50
10 7
10
ド61
11
ド62
16
ド60
6
23
6
A
A′
ド59
16
23
29
20
用地外
溝 3
ド58
7
12
19
ド64
19
未掘
攪乱
17
B′
9
19
33
8
A 520.50
A′
0
2m

挿図16　土坑・柱穴(6)

2。一ツ塚古墳

調査対象地は、一ツ塚古墳南脇を通る道路の拡幅箇所とその西に建設される鉄塔部分であった。道路箇所に長さ26.6m・幅2.4mのトレンチと連続して西側に長さ14.0m・幅9.0～ 7.6mの調査区を設定して調査にあたった。

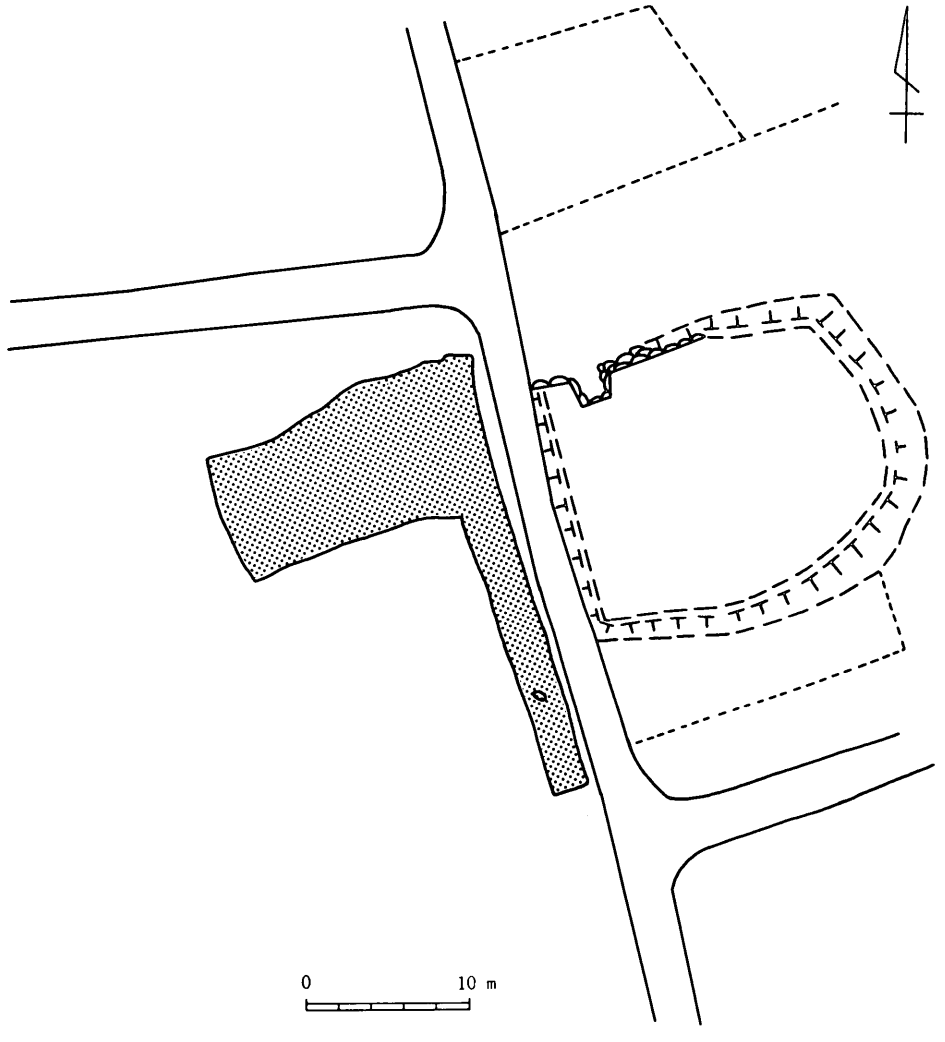
測量用の基準杭設置は、中川遺跡と同様に飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、㈱ジャステックに委託して実施した。本調査地の区画はＬＣ-94　12-20である。

土層は20cm前後の耕土下が赤黄色土の遺構検出面となった。遺構を検出するにはやや分かりにくかったので、赤黄色土上面を掘り下げて状況を確認した。

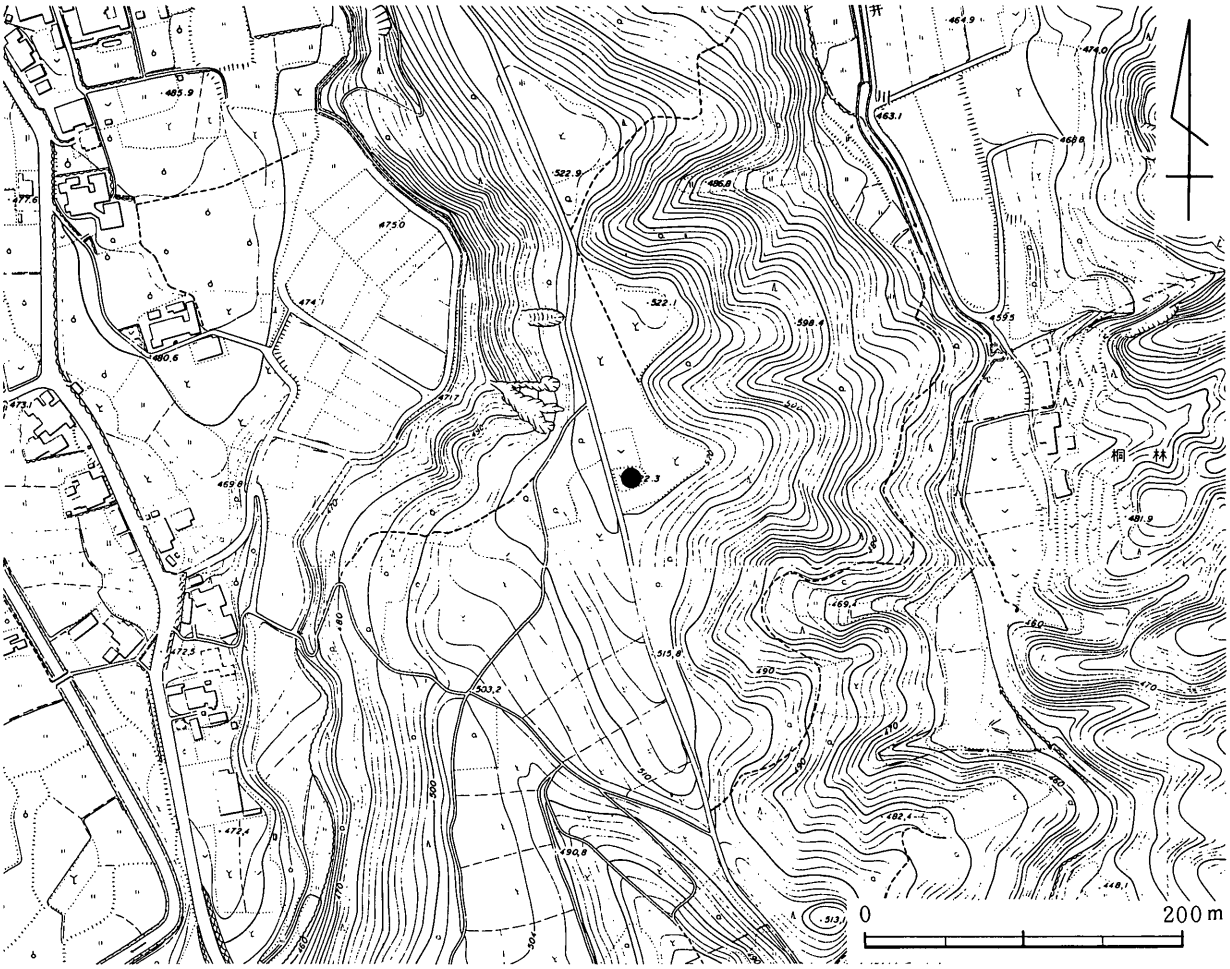
調査の結果、トレンチ東部で70×42cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る意味不明の穴があったのみである。

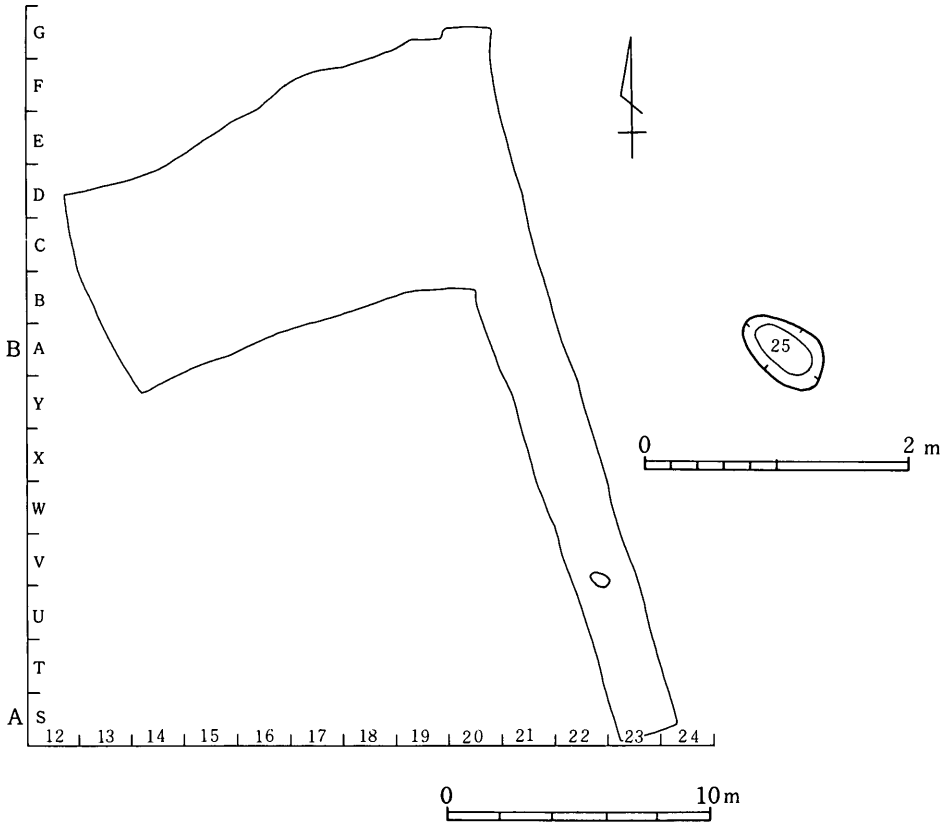
一つ塚古墳に関しては、周溝は検出されず、本調査地までは範囲が及んでいないことが確認できた。

出土遺物は、赤黄色土面から黒曜石片が２点出土したのみである。



挿図17　一ツ塚古墳調査位置図





挿図18　一ツ塚古墳周辺図及び全体図・穴

Ⅳ まとめ

今次調査によって検出された遺構・遺物はすでに述べられてきたとおりである。時間等の制約により、十分な説明や検討が加えられていないのは遺憾である。ここでは、調査によって得られた成果・問題点を、中川遺跡・一ツ塚古墳ごとに指摘してまとめとしたい。

1．中川遺跡

縄文時代は、土坑が調査区ほぼ全域に分布している。そのほとんどが縄文時代中期中葉で、あまり長期間にわたって構築されたとは考えにくい。中には、石皿を持つなど墓としての役割を想定されるものがある。すべての土坑が同様な役割とは考えられないが、いずれにせよ大部分が人為的なものと想定される。墓域的色彩の強い土坑を主体とした集落縁辺部的状況を示す地点を調査したといえる。集落域を求めるとすれば、地形的にみて、北側は100m程で湿地帯となって台地が終息するのに対し、南側には中川遺跡・中村中平遺跡の立地する茂都計川に沿った台地が広がっている。南側に集落域を求めることが妥当と考えられる。

弥生時代後期は竪穴住居址が2軒あり、該期集落の一端が明らかになったといえる。1軒は削平されており、もう1軒は大部分が用地外にかかっており、必ずしも良好な状況では調査できなかった。直接結びづく遺物の出土に欠けるので、詳細な時期決定はできないが、2軒の家が同時期に存在したことも考えられる。仮に同時存在したとしてもその間隔は離れており、大規模な集落を構成するとは考えにくい。集落の中心地域は地形的にみて縄文時代と同様に南側にある可能性が強い。

飯田・下伊那の弥生時代後期は、集落が高位の段丘や扇状地まで広がりを見せ、一つのピークを示していることが指摘されている。当遺跡もそうした段階での集落の一つといえる。自然環境をみれば、東側に生産域が想定される湿地帯が広がっており、そこで稲作を行っていたことが想定される。高位の段丘上には、同じような集落立地を示す遺跡が多くみられる。伊賀良地区にも、酒屋前遺跡・殿原遺跡・中島平遺跡・上の金谷遺跡等がある。いずれも湿地帯周辺部に立地するが、集落規模に違いをもっている。例えば殿原遺跡は調査された竪穴住居址だけでも90軒にのぼり、当地方でも有数の規模を誇っている。当遺跡では未調査部がほとんどだとはいえ、そんな大規模集落を構成するとは考えにくく、殿原遺跡とは集落の性格差をも推測できる。

中世は、用水路と考えられる溝址3と柱穴がある。遺物の出土が少ないので掘削時期や埋没時期を決め兼ねるが、平安時代末から始まった伊賀良地区の井水掘削による新田開発に伴う可能性を指摘しておきたい。

柱穴の大半も中世と考えられる。建物址として並ばなかったので柱穴としたが、遺構としては建物があった可能性がある。

遺物は断片的な資料得られただけであるが、その中で溝址3から出土した土偶脚部は特筆すべきである。脚部のみで10cmを測る大型の土偶で、沈線による文様がつけられる。形態や文様から縄文時代後期に位置づけられる。しかし、当地方ではこうした土偶の出土がほとんどないので、詳細な位置づけは今

後の課題としたい。

2．一ツ塚古墳

調査前は、古墳の現況から帆立貝式古墳として登録されていた。しかし、今次調査の状況等から円墳と考えられる。それは、以下の理由からである。

古墳墳丘南裾に道路が通っており、帆立貝式古墳であれば、当然今次調査地に周溝がかかるはずであること。

調査中に地権者から、古墳墳丘を耕作によって削平し、その土を南側の道路付近まで広げたとの証言を得られたこと。

くびれ部と考えられる位置にそのとき積んだと考えられる石垣が残っていること。

調査地では古墳関連遺構はなく、古墳という貴重な文化遺産を現状のまま残すことができた。文化財保護の観点からみて幸いなことであった。

引用・参考文献

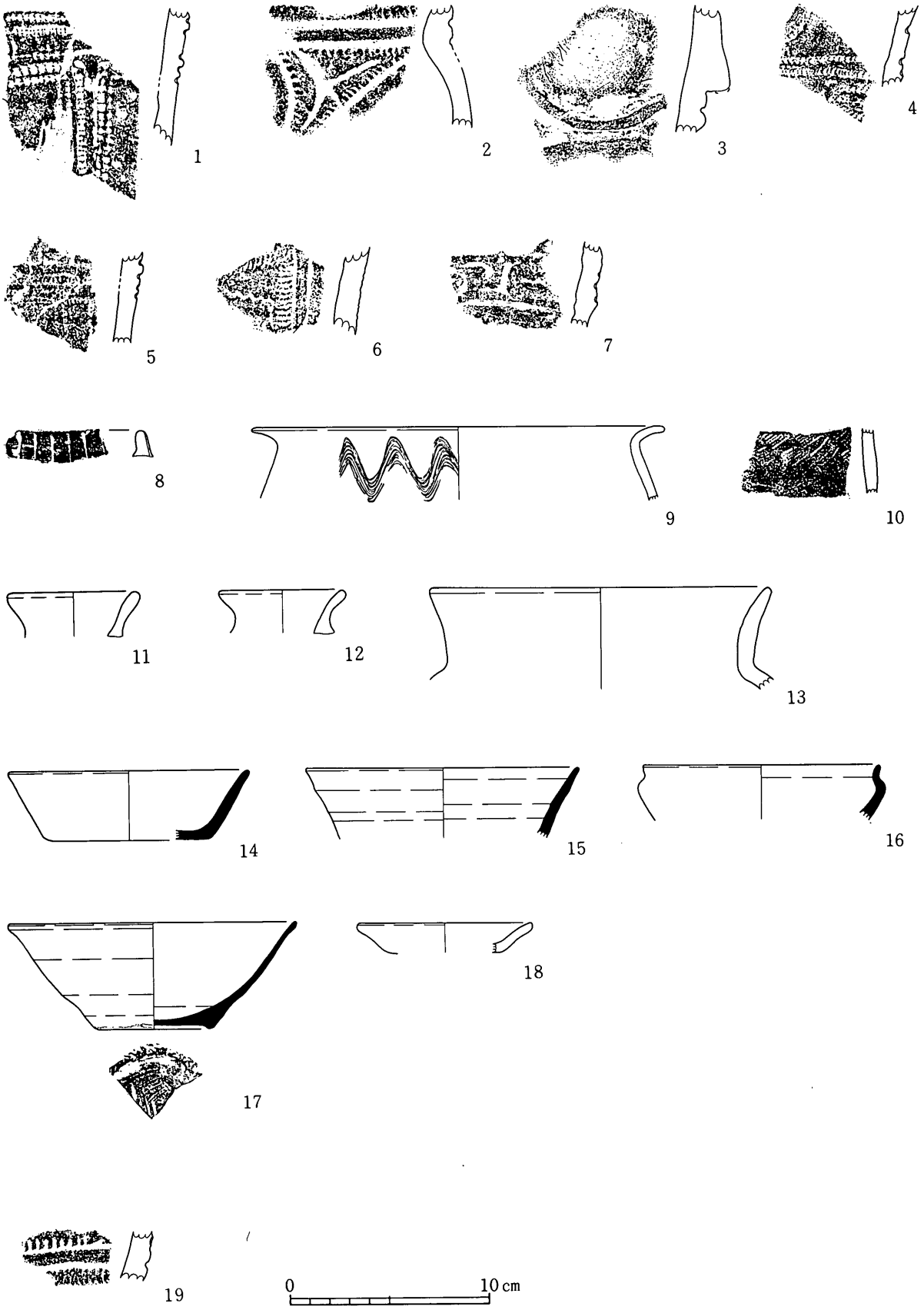
飯田市教育委員会　1977『伊賀良中島平』

飯田市教育委員会　1987『殿原遺跡』

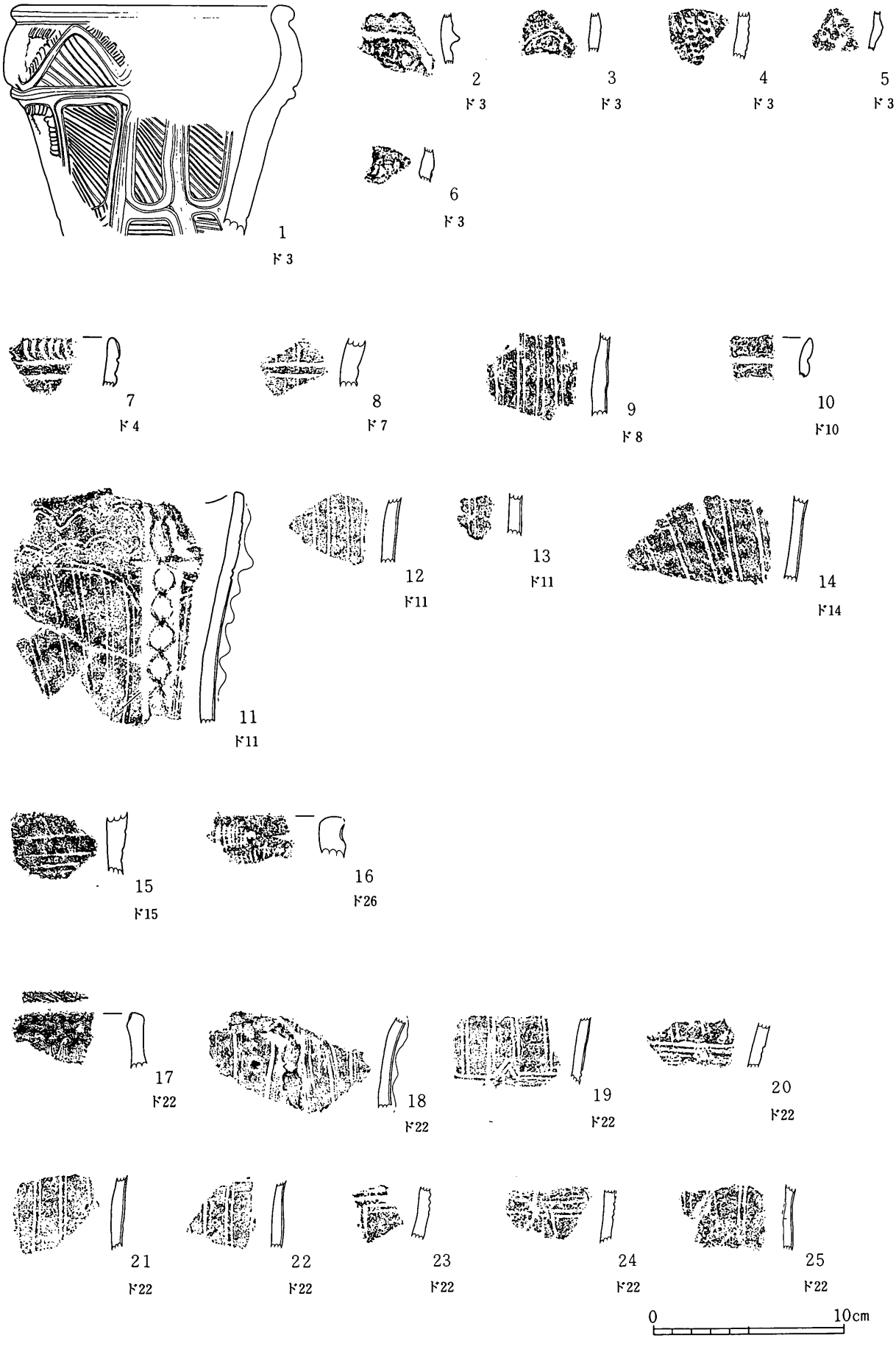
飯田市教育委員会　1992『殿原遺跡』

飯田市教育委員会　1994『中村中平遺跡』

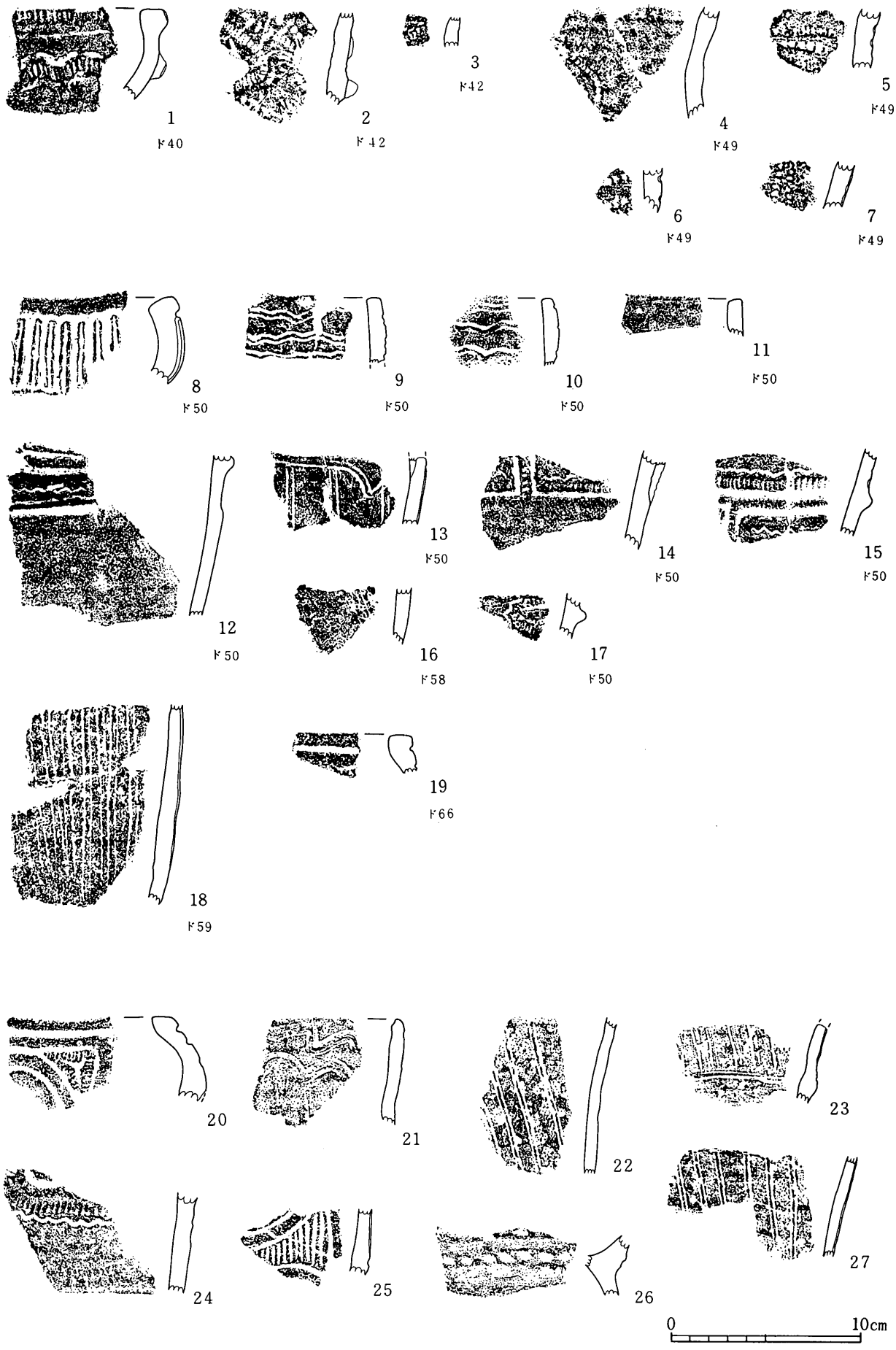
長野県教育委員会　1973『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　飯田市地内その２』



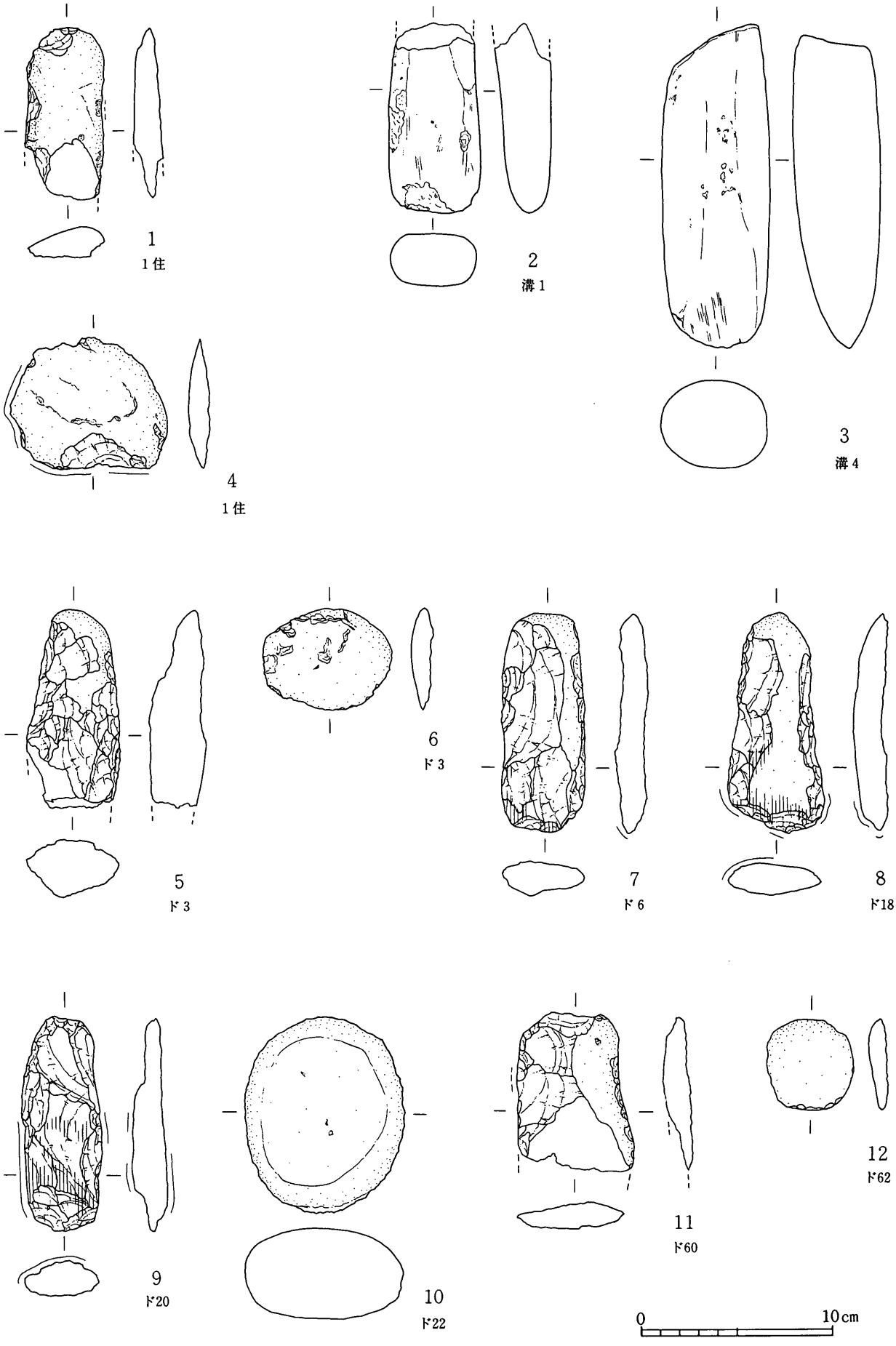
第1図　溝址3（1～18）・溝址4（19）出土土器


1
ド3
2
ド3
3
ド3
4
ド3
5
ド3
6
ド3
7
ド4
8
ド7
9
ド8
10
ド10
11
ド11
12
ド11
13
ド11
14
ド14
15
ド15
16
ド26
17
ド22
18
ド22
19
ド22
20
ド22
21
ド22
22
ド22
23
ド22
24
ド22
25
ド22
0
10cm

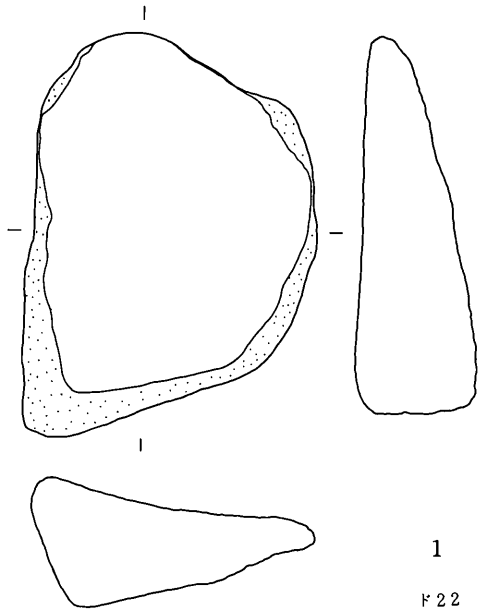
第2図　土坑出土土器

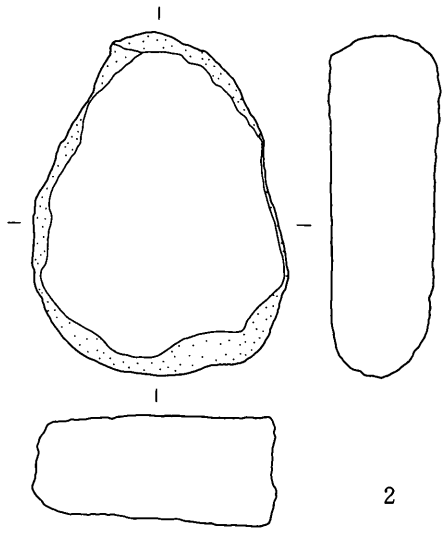


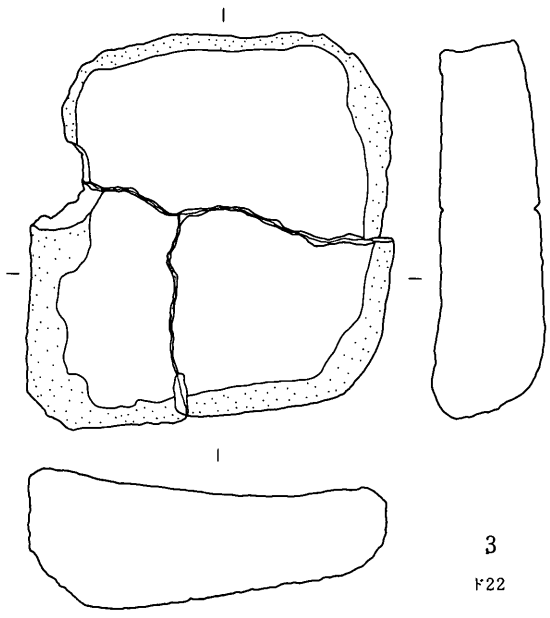
第3図　土坑・遺構外（20～27）出土土器

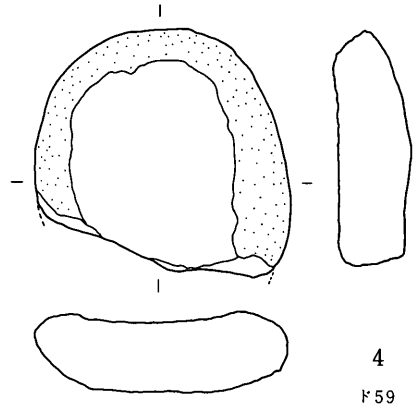


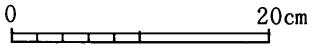
第4図　溝址・土坑出土石器



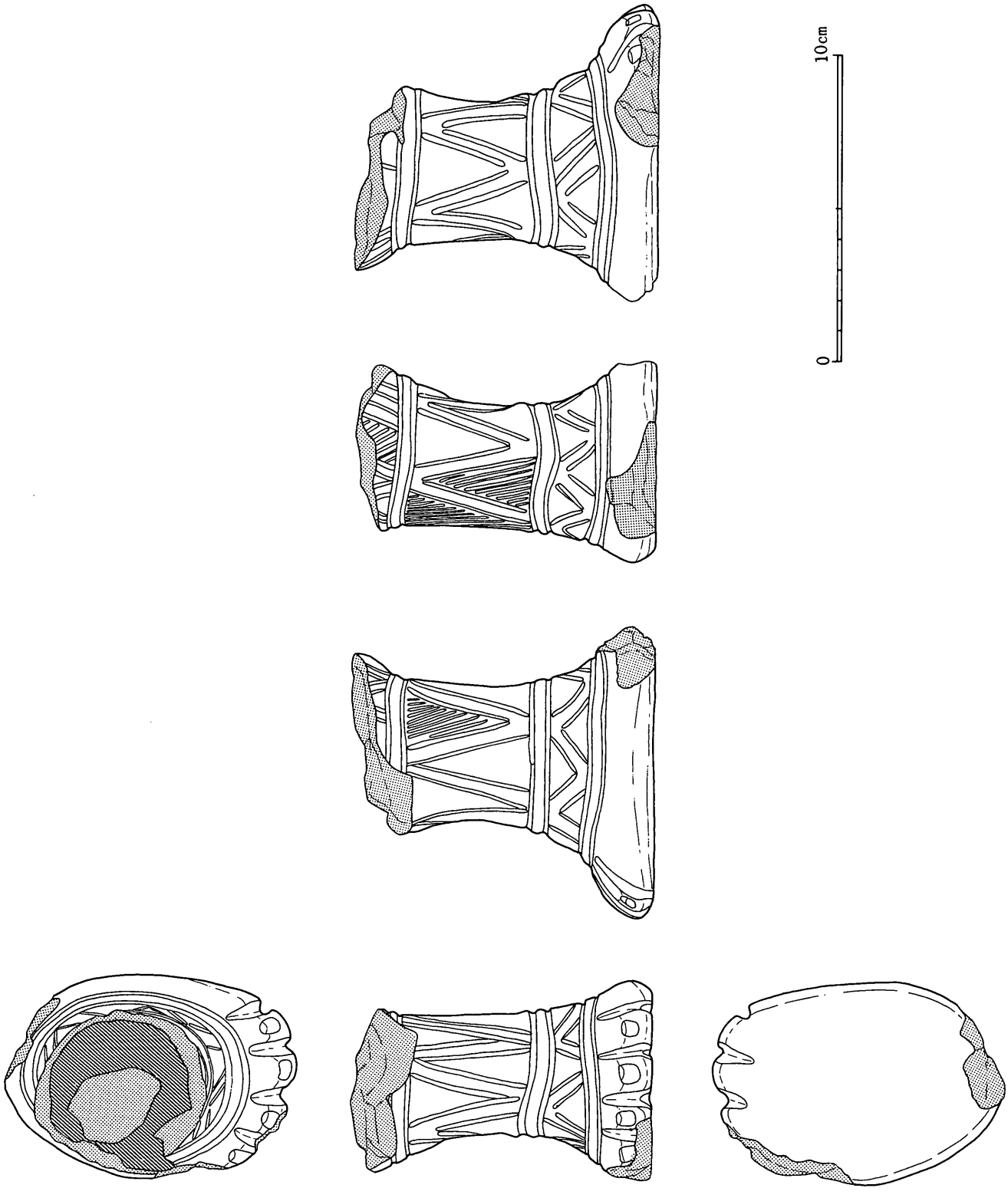








第5図　土坑出土石皿



第6図　溝址3出土土偶

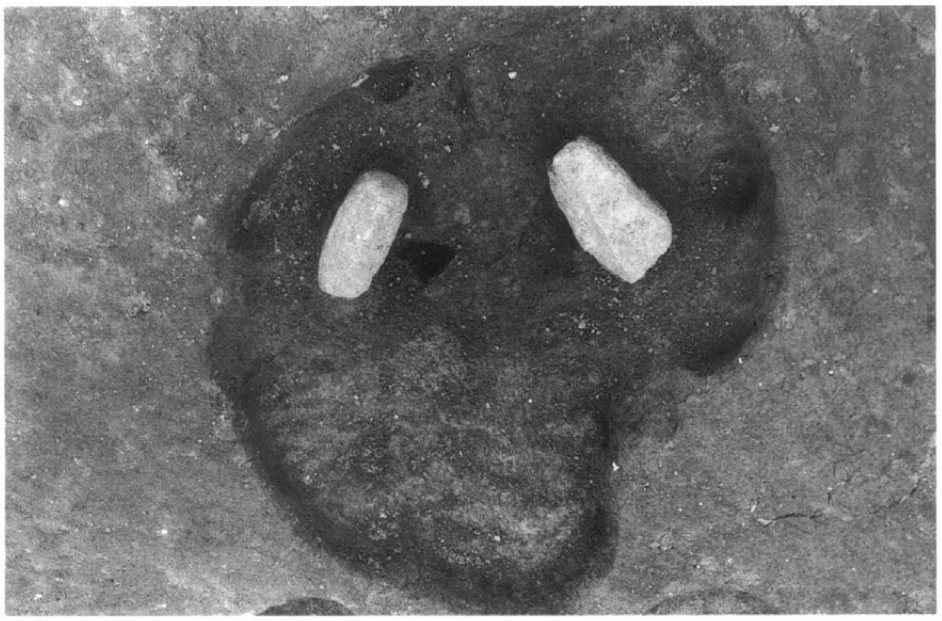
中川遺跡遠景
（南東から）

中川遺跡近景
（北西から）

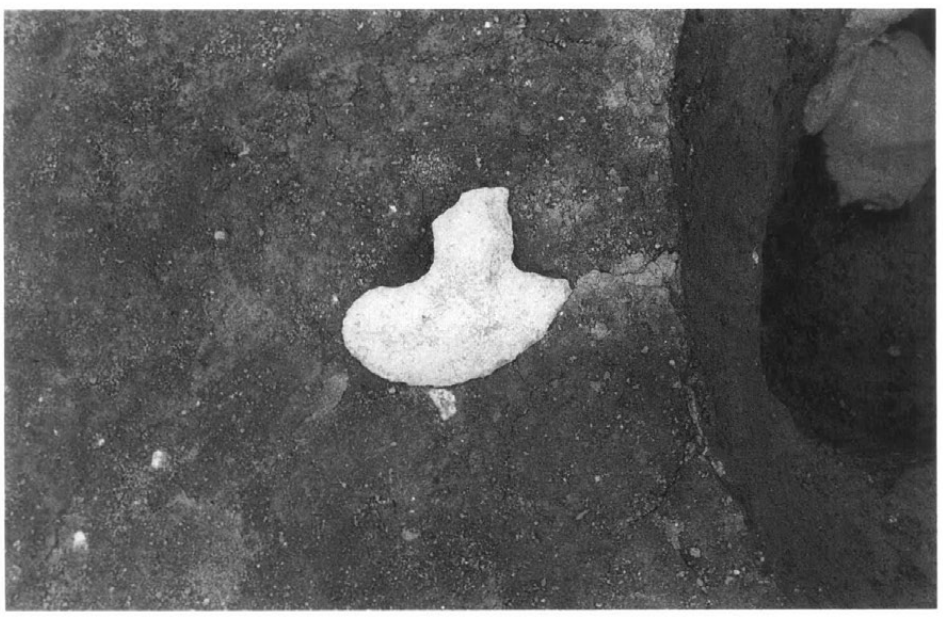
中川遺跡近景
（南西から）

図版 2

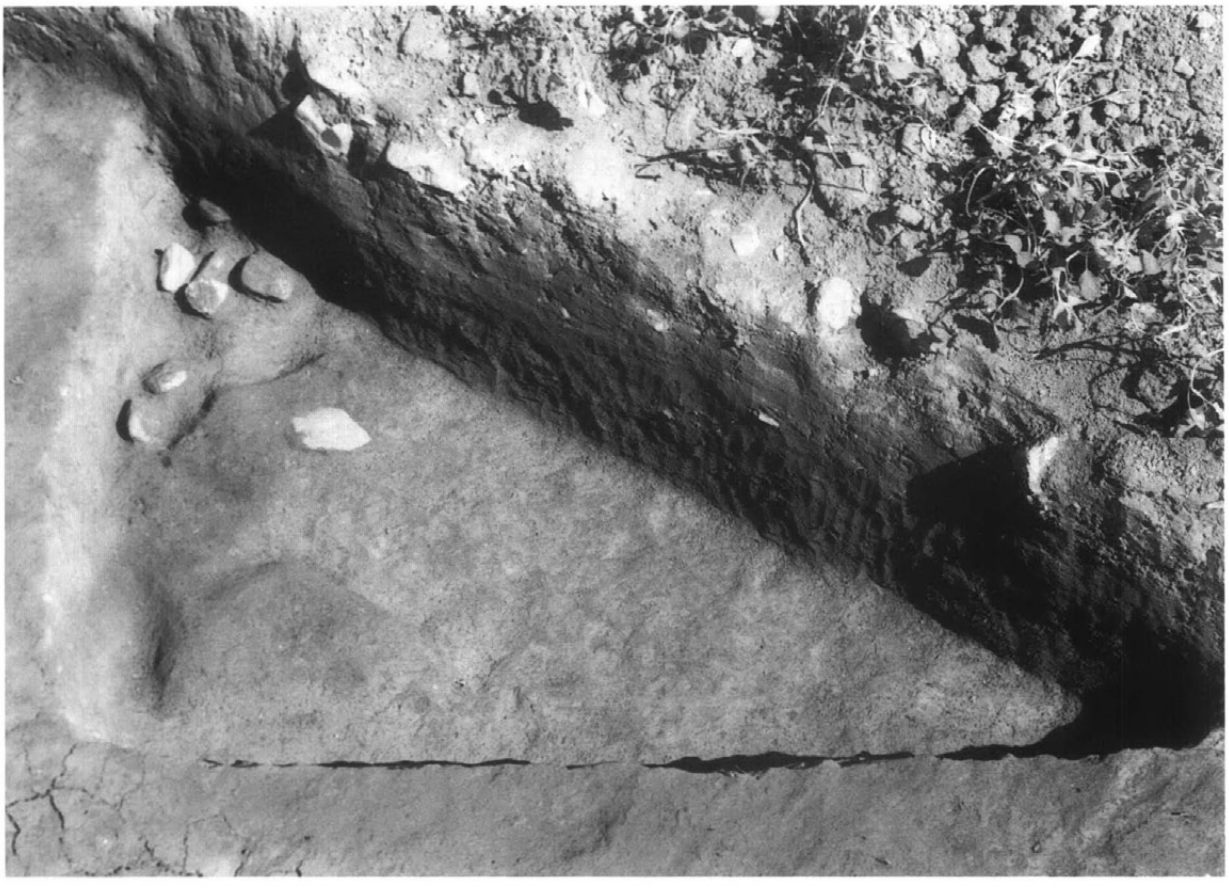
1 号住居址



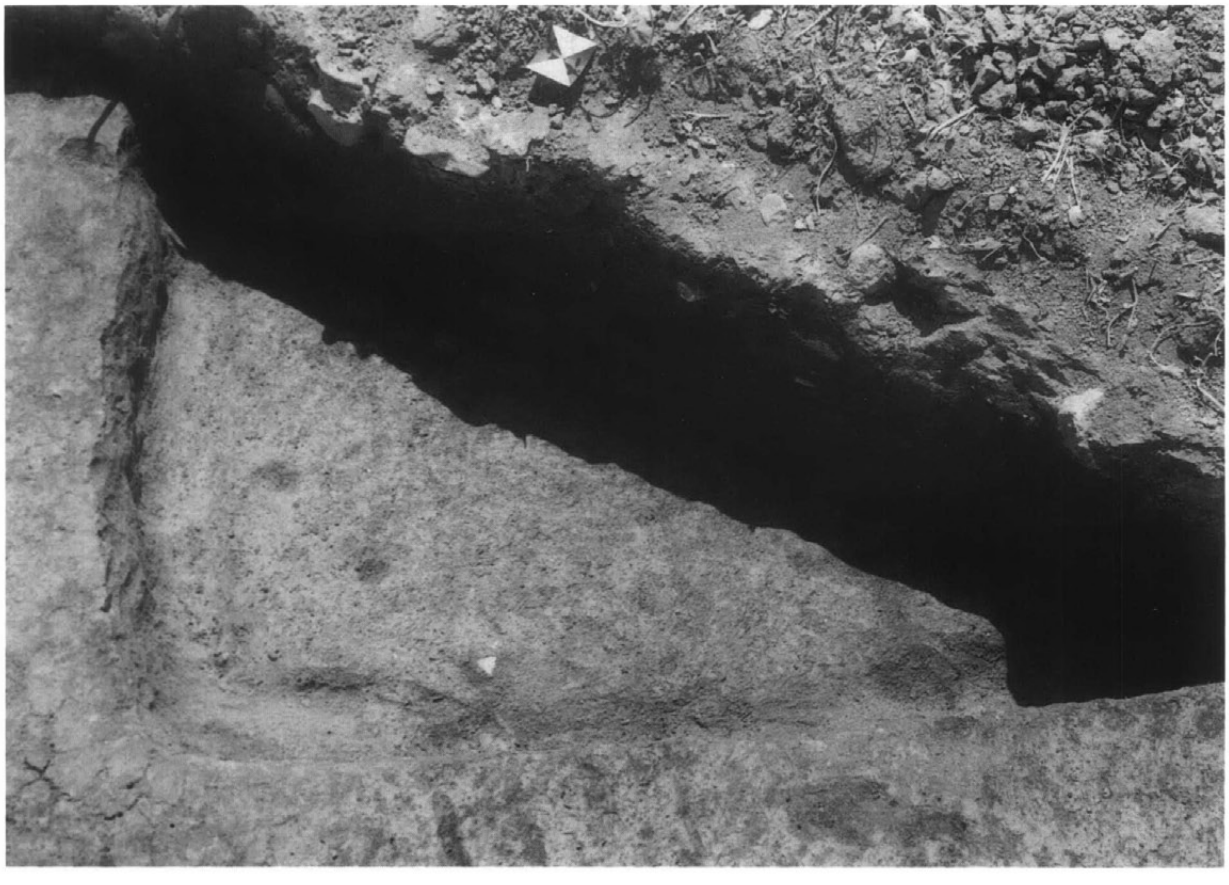
1 号住居址　炉址



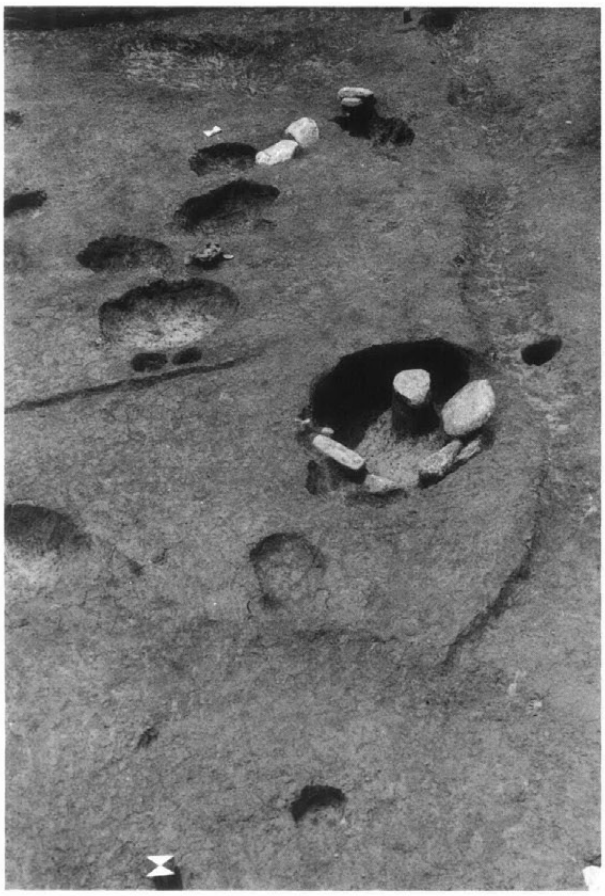
1 号住居址
有肩扇状形石器



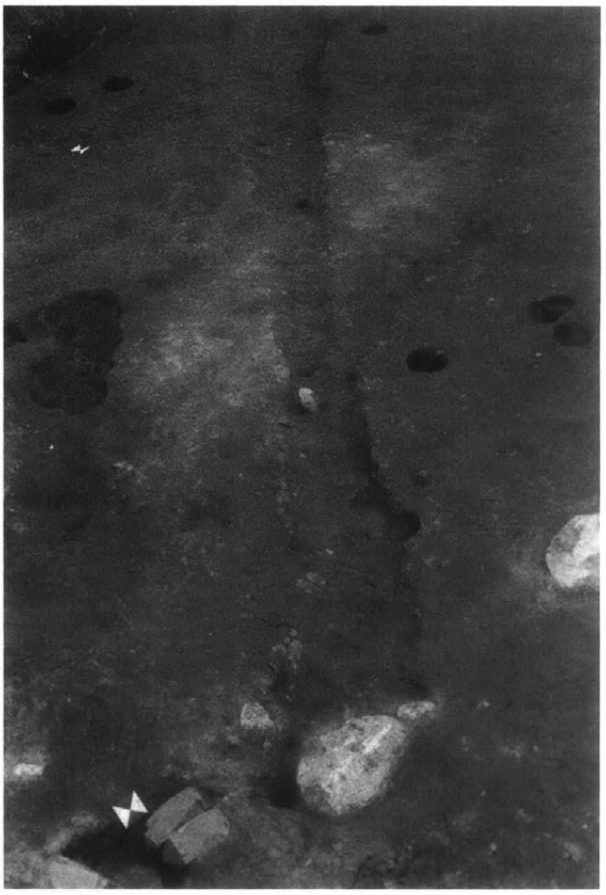
2 号住居址　礫出土状況



2 号住居址



溝址 1 （東から）



溝址 2 （北西から）

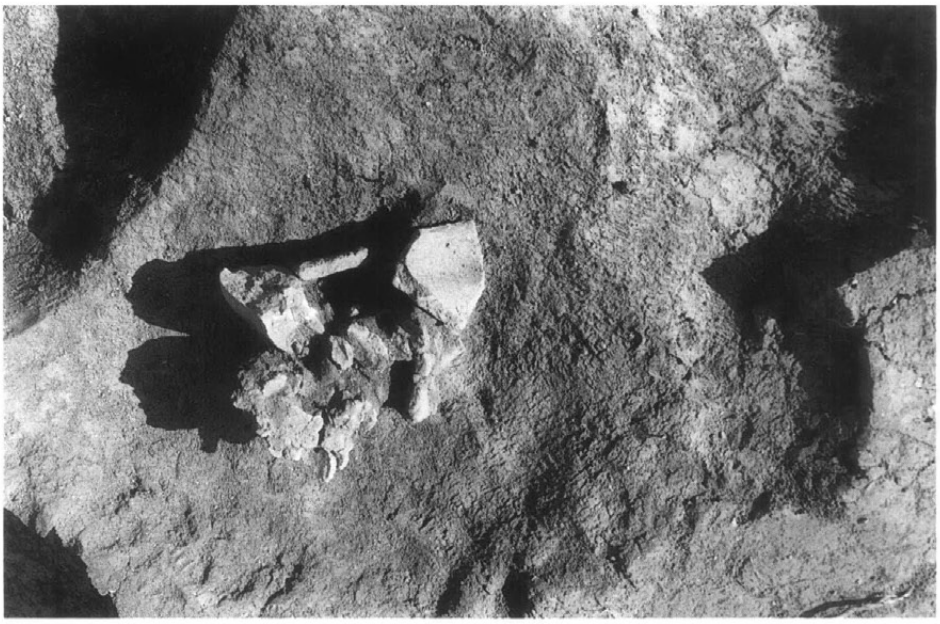
溝址 3 （南から）

溝址 3 （北から）

溝址 4 （南から）

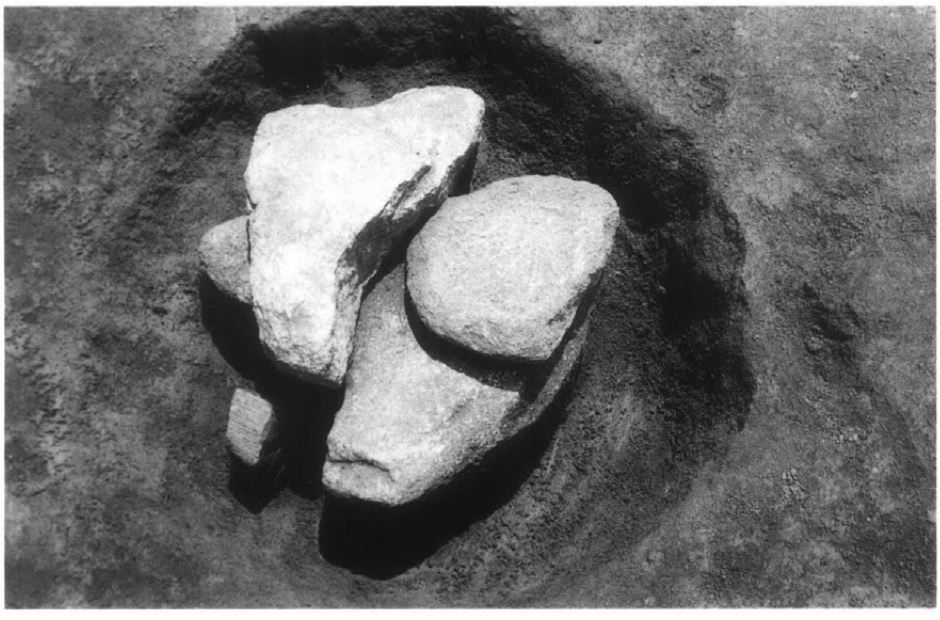
溝址 4 （北から）

溝址 3・4 （北から）



土坑 3
土器出土状態

土坑22
石皿・礫出土状態



土坑59
石皿・礫出土状態

東側調査区
南部土坑・柱穴
（西から）

東側調査区
南部土坑・柱穴
（東から）

東側調査区
中央部土坑・柱穴
（南西から）

東側調査区（南西から）

東側調査区（北から）

西側調査区（南東から）

西側調査区（北から）

東側調査区（上空から）

東側調査区（斜め上空　東から）

西側調査区（上空から）

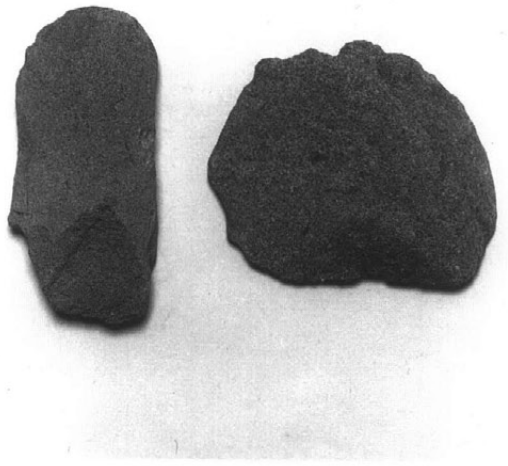
西側調査区（斜め上空　東から）

溝址３　出土土偶正面

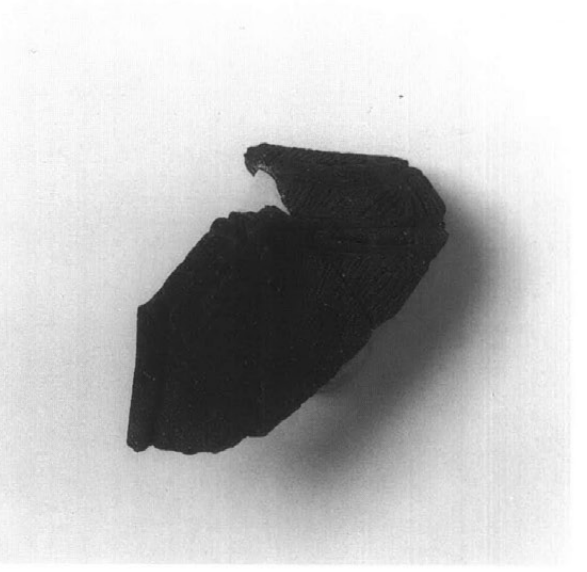
同　左側面

同　裏面

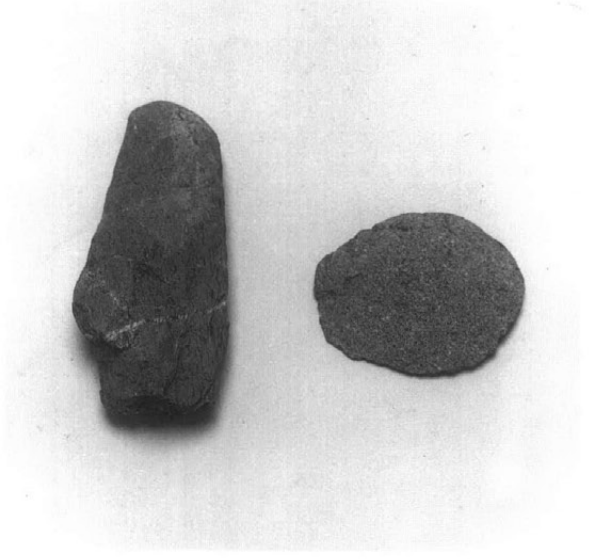
同　右側面



1号住居址出土石器

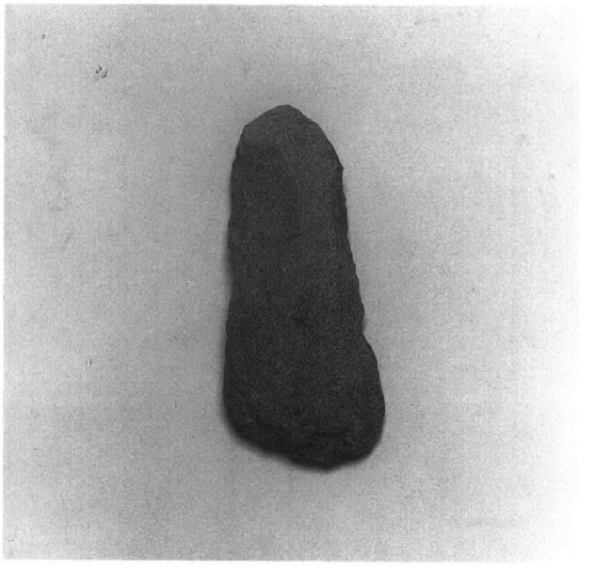


土坑3　出土土器

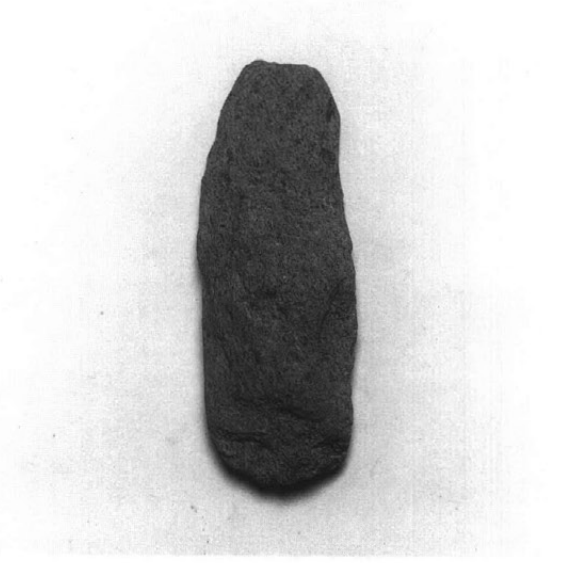


土坑3　出土石器

土坑6　出土石器

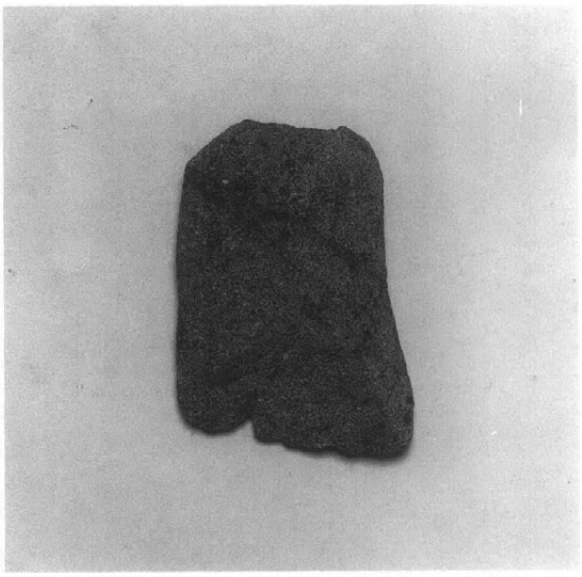


土坑18　出土石器

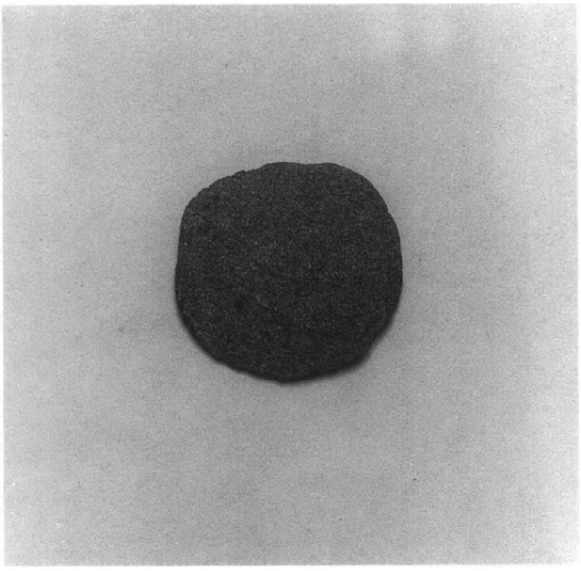


土坑20　出土石器

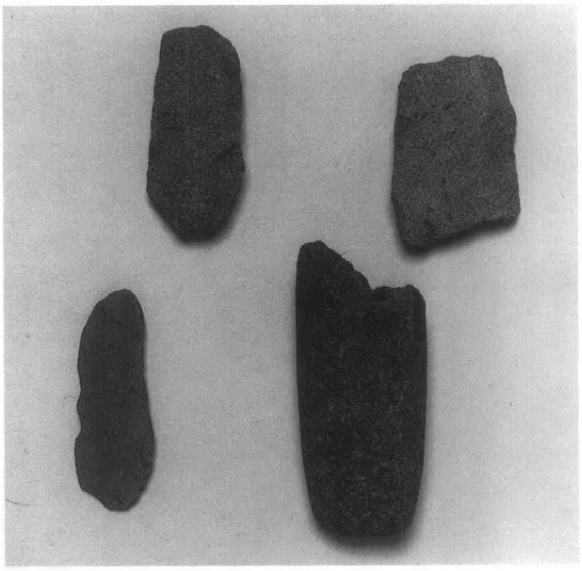
土坑22　出土石器



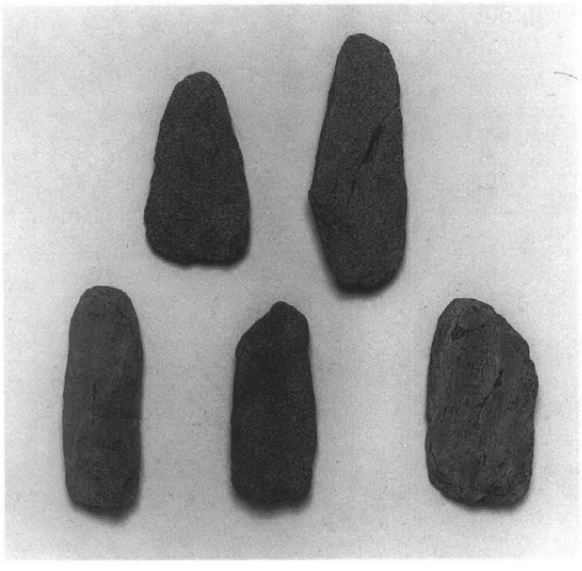
土坑60　出土石器



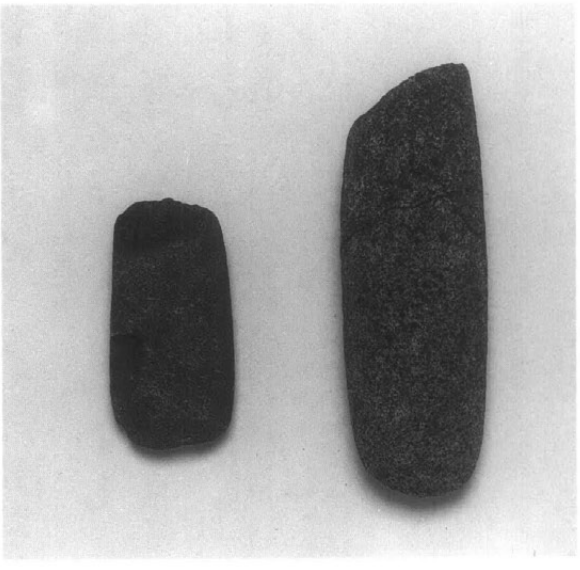
土坑62　出土石器



溝址 1　出土石器



溝址 4　出土石器



溝址 4　出土石器

中川遺跡
重機による拡張
スナップ

中川遺跡
溝址の掘り下げ
スナップ

中川遺跡
ラジコンヘリ
スナップ

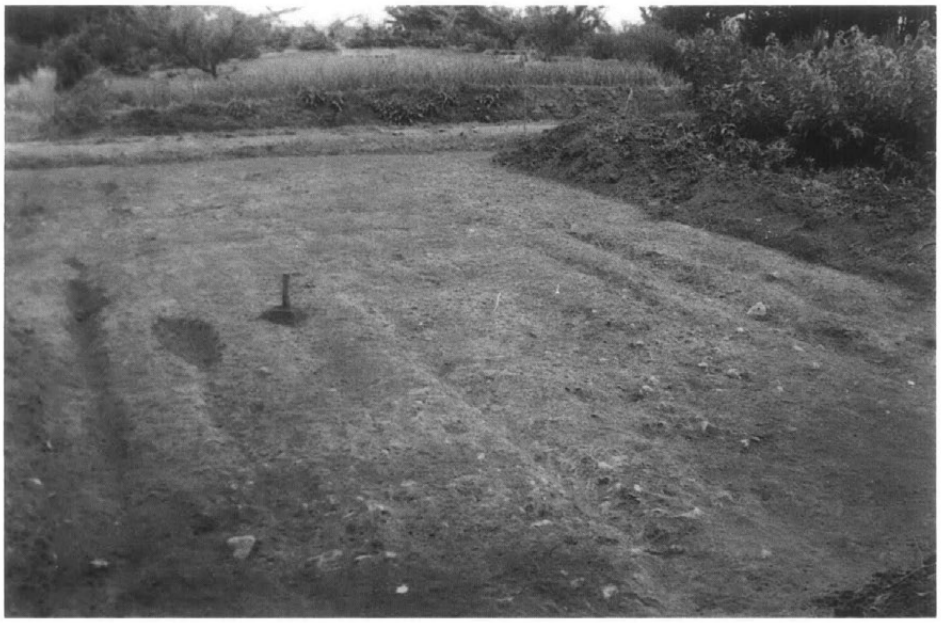
一ツ塚古墳近景（北から）

一ツ塚古墳調査地近景（南から）

一ツ塚古墳　穴

一ツ塚古墳　トレンチ（南から）

一ツ塚古墳　トレンチ（北から）



一ツ塚古墳調査区全景
（西から）

一ツ塚古墳調査区全景
（東から）

一ツ塚古墳調査区全景
（南西から）

報 告 書 抄 録

	なかがわ　　ひとつづか
書　　名	中 川 遺 跡・一 ツ 塚 古 墳
副 書 名	変電所・送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	山 下 誠 一
編 集 期 間	飯田市教育委員会
所 在 地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地　TEL 0265-53-4545
発行年月日	西暦1996年 3 月21日

ふりがな 所収遺跡目名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 °′″	東 経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
なかがわ 中　　川	長野県 飯田市 中村	2053		35度 28分 50秒	137度 47分 55秒	19940621 ～ 19940805	1,402	中部電力株式会社 変電所建設に伴う 事前調査
ひとつづか 一ツ塚古墳	長野県 飯田市 中村	2053		35度 28分 15秒	137度 48分 25秒	19940630 ～ 19940708	188	中部電力株式会社 送電線鉄塔建設に 伴う事前調査

所収遺跡目名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中　　川	集落址	縄文時代 弥生時代 中　　世 近　　世	土坑 竪穴住居址　2軒 溝址　1本 柱穴　多数 溝址　3本	縄文土器・石器 石器 陶磁器 陶磁器	縄文時代中期中葉の土坑群・弥生時代後期集落・中世の用水路を調査
一ツ塚古墳	古　墳	な　し	な　し	な　し	古墳周溝はなく、古墳が調査対象地まで及んでないことが確認された。

中川遺跡・一ツ塚古墳

変電所・送電線鉄塔建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1996年3月　発行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯田市教育委員会

印　　刷　杉本印刷株式会社